

594

自福田大學三十五年度
文部省教育課
教育檢定試験問題
久保得二
著

久保得二 木原順一
市野彌三郎 種村宗八 述



教育員檢定試驗問題擬答



第十八回

修身、教育、國語及漢文科完結

早稻田大學出版部藏版

第十回 教員檢定試験問題擬答目次

豫備試験の部

修身科	(市野彌三郎述)	一
教育科	(市野彌三郎述)	一一
國語及漢文科の一	(種村宗八述)	二三
國語及漢文科の二	(種村宗八述)	三五

本試験の部

修身科	(市野彌三郎述)	五五
教育科	(木原順一述、中島半次郎四)	六九
國語及漢文科の一	(種村宗八述)	八三
國語及漢文科の二	(久保得二述)	九七
國語及漢文科の三	(久保得二述)	一〇三

教員檢定試験問題擬答

修身科

(明治三十七年八月廿二日試行豫備試験)

講師 市野彌三郎述

道徳的行動の目的ニ關スル諸説ヲ舉ゲテ之ヲ説明セヨ

道徳的行動の目的に關しては、歴史的に種々の學説が生起したが、其の主要なるものを取つて之を區別すれば、快樂説、克己説、自己實現説の三種となる。

(一) 快樂説とは、快樂を以て道徳的行動の目的とするものであつて、吾人により多くの満足と快樂とを附與する行為を善なる行為と認め、吾人により少き満足と快樂とを附與するものを惡き行為と見做すものである。即ち吾人が行為の動機たる所の欲望は、其の結果より生ずる快樂を豫想するが故に、吾人の行為は必ず快樂を欲求して動くものでなくてはならぬ、再言すれば、快樂の感情の伴はないものは、吾人が行為の動機となることがないと見て、吾人はすべて快樂を追求して止ま

ざるものでつまり斯くするが人類の目的であつて、やがて又快樂を目的とする行為を善なりと認定したのである。

されど快樂といふものは瞬間的のもので今日の快樂は明日の苦痛となり、昨の苦痛は今日快樂の因となる等、目前の快苦の必らずしも永久の其れにあらざることを悟つて、比較的永久の快樂を追求するを以て目的としたものが所謂幸福説である。而して快樂説が自己の快樂を目的とする時は個人的快樂説であつて、利己主義等と稱するもの、又之を社會的に擴充して最大数の幸福を目的とするものは社會的快樂説であつて、功利主義若しくは進化的快樂説と稱するもの、これである。要するに社會の進歩に伴なうて、個人間の關係は愈々密となりて、遂に有機的關係を有するに至り、孤立的の儘にては到底生存を全うすること能はず、隨つて快樂若しくは幸福の如きも到達すること能はざるが故に、快樂説が個人的より進んで社會的となつたのは進化自然の法則である。

(二) 克己説　この説は快樂説に反對して起つたもので、快樂説が快樂を以て唯一の目的とする代りに、抽象的の理想を以て行為の目的としたのである。蓋し快

樂説の弊は、快樂の感情が個人的であることと、其の瞬間的であることとに依つて、之を行為の目的とするには甚だ不確實で多くの矛盾を含むといふので、全然快樂を排し、情欲を斷滅し、純理性の命ずる所に隨つて行動するを以て道德的行為の目的とはしたのである。これは單に「義務の爲に義務を盡せ」と教へたるカントの嚴肅主義の如き其の好典型である。夫れ快樂を快樂として追求することの吾人の幸福を増す所以にあらざることは勿論、快樂は欲望満足の結果なればそを目的とするは既に本末を失するの難は免れない。で其の弊に堪えずして克己説の起つたのは至當のことであるが、吾人の行為は一面に感情的の要素あつて始めて理想の實現されるものであるから、抽象的の理想の如きは到底吾人の空想に止まるべきものである。故に克己説も快樂説と同様に、未だ不十分たるを免れぬ。これに於て吾人は、理想にも感情にも偏重偏輕せぬ完全なる目的を求めねばならぬ、この缺陷を補はんとして顯はれたものは實に次の自己實現説である。

(三) 自己實現説　この説は快樂説と克己説とを調和したもので、即ち欲望を整ふるに高尚なる理想と周密なる經驗を以てして、其の盲目的鉢欲的に陥る弊を

救ひ出し、理想に加ふるに衝動的執意的動機を以てして完全に自己の性格の發展を期するものである。で自己實現説は能動者として自己を中心とするも、其の自己たるや一面には特立の個性を有するが社會的に見るときは其の一團員たるに過ぎぬので、自己の性格を遺憾なく發展するには其の個性を重んずると同時に社會即ち周圍に適應することを務めねばならぬと説くのである。故にこの點より考へれば、自己實現説は個人的でもなければ社會的でもなく、其の兩方であつて、社會的個人主義といふべきである。

二、品性と習慣との關係ヲ論ゼヨ

夫れ吾人の行爲にして有目的の行爲即ち理想の反動を受けた行爲であるならば、必らずや其の行爲は吾人の品性より出てたものでなくてはならぬ。若し吾人の意志が一種の論者の唱ふる如く、必然的のものであつたならば知らず自由なる働きを有するものならば、吾人は目的とする理想を實現すべく意志を働かすことが出來やう。即ち吾人は意志の力と智識とに籍つて、或る行動を爲す様に一種の道德的傾向を造ることが出来る。尤も人は生れながらにして氣質といふものが

あるが、其の訓練の結果として或る度までは改造することも矯正することも出来るのである。而してこの訓練された氣質は吾人が品性と稱するものである。

故に品性といふものは、吾人が意識的に考へた目的に相當する様にこの道德的傾向を改整する習慣に外ならぬのである。換言すれば品性は意志が欲望や衝動を整頓する習慣的方法を指すのであるから、品性は習慣の結果より成つたものであつて、又其れが習慣として働くのである。されば品性と習慣とは元來同一物で之を引き離して考へることが出來ねど、若し強いて之を區別すれば、單に或る一種の傾向を有する心的活動の形式を指すときは之を習慣といひ、習慣に道德的意義を附け加へたものをば品性と稱するのである。故に吾人の品性は習慣に由つて生ずとは吾人の常に唱ふる所であるが、習慣を離れて別に吾人の品性といふものが存在するのではなからぬ。

三、智仁勇ノ三徳ヲ倫理學上ヨリ説明セヨ

智とは儒教に於て誠心誠意の道は格物致知に存すと説くが如く、正當なる道德的判斷をなさしむる所の知識である。王陽明が知は行の始めと言つた如く、經驗

は吾人の盲目的衝動的の意志を、合理的道德的たらしむるもので、知識なき行爲は、其の結果の如何に拘はらず殆んど道德的評價を價ひせぬものである。仁とは孔子の思想に於て種々の意義に用ゐられて、甚だ不確實の様であるが、要するに孔子か「己立たんと欲せば人を立つ」と言へるが如く、同情若しくは博愛心を指したもので、依て以て吾人が行爲の目的となるものである。又勇とは善なることを知れば之を行ひ、惡を知りて之を退くることの勇氣であつて、吾人の行爲の意志的側面を指したものである。かの「義を見て爲さざるは勇なきなり」と言つて、優柔不斷事に臨んで常に趨趨逡逡するのは皆意志の薄弱なるに由るのである。

四、山鹿素行ノ倫理説ヲ叙述セヨ

素行は周公孔子の人と爲りを慕ひ、群儒の衆議を排して直ちに聖人の道を体認せんとしたもので、仁義禮智の四徳を以て修身の要綱となし、就中仁を以て根本と爲し、他の諸徳は以て仁に達せんとする手段に過ぎぬものと見たのである。而して彼は天命の性を信じて良心説を説き出し、人に善惡あるは全く教育習慣に由るものと考へた。且彼れは實行を重んじ、義務の觀念を尊び、人は各其職分を盡して

國家の爲に忠誠を致すべきことを教へ、國體を尊び、國風を重んじて、國家主義を鼓吹したのである。即ち彼が唱道した所の武士道なるものが身を顧みず奉公の忠を致す所の忠義を以て本領となし、朋友に信を厚くし、身を慎み常に意志を鍛錬して、義を泰山の重きに置き、死を鴻毛よりも軽んずべしと勸奨したのも、詰り彼れが國家主義より胚胎したものであらう。

五、品性修養ノ方法ヲ授業スル教案ヲ作レ

題目 品性修養の方法 程度 中學校第五年

豫定時間 一教時(凡五十分)

(一)豫備

(イ)人生の目的

(ロ)人の尊ぶべきは高上なる性格を有するに在ること

(ハ)品性修養の意義及び其の重要なる所以

を問答して、品性修養の方法として左の事項を授ける。

(二)提示

次の事項を順次に説明して、其の要點を筆記せしめる。

(1) 立志

何事を爲すにも確固たる信念を以て、其の必成を期して勇猛精進すべし。品性の修養は最も鞏固なる意志を以てせざれば折角の思立ちも中道にして廢するに至るべし。

(2) 習慣

習慣は第二の天性といふ程なれば始めに難澁を感ずることも習慣の結果、終に容易となる。習慣は始めを慎むべし。年若き時は習慣の形成甚だ容易なり。品性は善を爲す習慣たるに過ぎず。

(3) 理想

高上なる理想を立て、其れに向ひて進むべし。常に自己の行爲が果して其の理想に背馳せざるや否やを省みるべし。品性の修養といふは取りも直さずこの理想を實現するに在り。

教科書を用ゐる時は、一生を指して書を読ませ、上の事項と對照して問答し、次に不

審を質さしめてこの項を終る。

(三) 應用

上に授けたることを復習せしめ、品性の修養と其れに關する知識とは如何の關係あるかを問ひ、道徳知識は實行を俟ちて其の價值あるもので、之れを知るも行はざれば知らざるに俾しきことを説き、常に品性を高上にせんことを念頭に置きて、善を爲すに惟れ日も足らずといふ様にすれば、必らず他日の大成を期すべきことを訓諭する。

夫れ真正なる生命とは、吾人の祖先に由りて
蓄積せられたる幸福の貯蔵に何物かを貢献
し、以て現代の資産を増殖して、之を後世に寄
與する所の生命是なり。(トルストイ)

教育科

(明治三十七年八月廿二日施行準備試験)

市野彌三郎述

一、衝動、本能、欲望ノ本質ヲ叙シ其區別ヲ明ニセヨ

衝動とは欲望を満たさんとして有意的に爲す行動であつて、吾人の發達した心的状態に在ては純粹の形としては殆んど目視するに難いのであるが、かの嬰兒が赤き火光を見て手指を動かし、足を刺激せば足をもがくなど、先づ其の例であらう。次に本能とは、多くは動物が生來具有する一種の衝動であつて、目的の先見なく且無意的に遂行しながら、而も其の目的を達する様に行動する性能である。かの赤子の生後直ちに母乳を吸ひ、雛見の卵殻を破つて出るや、直ちに餌を拾ふが如き其の適例である。

更に衝動と本能との別を言へば、衝動は有意的行動であるが、本能は無意的行動である。故に衝動は意思の力て動かすことを得るが、本能は然することが出来ぬ。て其の目的の先見、即ち結果の反動のない事、詳言すればこの動作が如何なる結果

を生ずるかといふ意識のないことは兩者同一であるが、衝動は現在の動作が目的を達し得られるか否といふことは未定であるけれど、本能は必ず其の目的を達するといふ相違がある。で、或る人は本能は動物のみが有し、衝動は人類にのみ具はる、而して衝動は發達するが、本能は固定的であると様に考へられたが、これは不確實な推論であらう。成程人類には本能がない様であるが、之は經驗の結果から盲目的の本能が有目的の衝動的行動と變化したのであつて、この變化は人類の其れの如く顯著ではないが、動物にも見られるのである。即ち肥臆推理聯想等を有する動物は本能的動作を再三する時は、其の結果を豫想するに至るので、決して生來的本能の様に盲目的ではないのである。

次に欲望とは現に吾人が感じ、有し爲しつゝあるもの、永續せん事を欲し、若しくは現在感ぜざる、有せざる、爲さざる或物を得んと欲することである。即ち寒さに暖を取らんことを欲し、音楽を聞いて長く其の止まざらん事を欲するが如き之である。併し欲望は現在の状態と、まだ現實に表はれ來ない理想の状態とが引合つて居るのであるから、其處には意志即ち衝動的の側面はないのである。故に我

等は同時に數多の欲望を有することも得、又其の欲望の孰れを先きに實現せんかと商量する事も得、其の實現を將來に延ばすことも得るのであるが、一度欲望が意志に作用する時は、必ず實現せねば止まぬものである。換言すれば衝動的欲望は即ち意志であつて、其れが動機となつて生じた結果は有意的行動である。又欲望が本能を喚起して生じた結果、若し變化せざる本能ならば、盲目的行動である。

二、習慣形成ノ次第ヲ述ベテ其教育上ニ於ケル價值ヲ論ゼヨ

生理學的に考へれば、習慣形成は腦髓の可塑性に基因するものである、其の次第は次の如くである。知覺神經を通過して腦髓皮質に進入した刺激流は、又之を進出せねばならぬ。で、この刺激が皮質内を通過するときは、其の結果として皮質に或る痕跡を残す、之を腦の可塑性といふのである。而してこの進出が屢次されるに随つて神経系統中の通路は漸く平坦になつて経過が容易になり、物を受けける時に手を捧げ、禮をする時に額つく様な簡單なものに至つては、全く器械的反射性解發となるものである。而して一層複雑な習慣でも、其の形成の次第は已上の如く、唯異なる所はAの筋肉が收縮すればBの筋收縮を起し、BからC、CからDと接

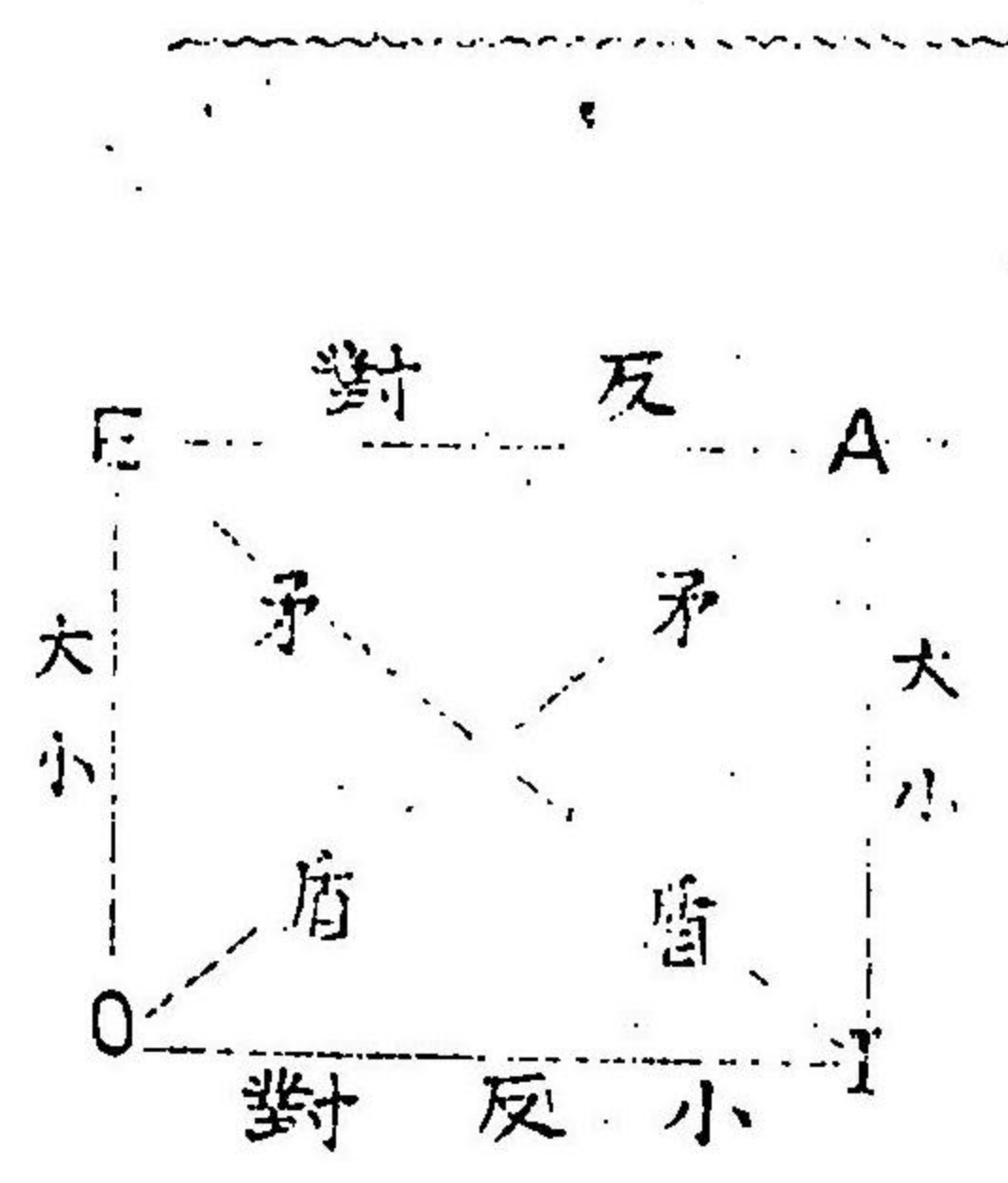
續的に神經中樞の解發を喚起するといふまでである。

次に習慣の教育上の價值を言へば、習慣は第二の天性なり、習慣の力は天性に十倍すといふ様に、習慣の力は偉大なもので、教育の効果を收め得ると否とは之を利用すると然らざるとに由る。吾人が日常複雑した動作を容易に爲し得るのも習慣なれば、判断や推理を敏捷確實にするも、勉強勞働の如き苦痛を忍ぶも、社會の制度や規則に甘んじて服従するのも、皆習慣の力である。更に品性の陶冶に在つて、生來の氣質の缺點を補ひ美質を添へるのも、習慣にして、凡て推理の面倒もなく、熟慮をも要せずして理想の實現と言行の一致とを得せしむるものは習慣の徳である。總じては良習慣を造るは教育の目的であるといふも過言ではなからう。

三、命題ノ種類ヲ舉ゲテ其對當(Opposition)ヲ述ベヨ

論理學上、命題とは、主辭、賓辭、繫辭の三要素から成つた文を指すもので、之を量に隨つて全稱、特稱の二種、質に隨つて肯定と否定の二種に別たれる。て一切の命題は必ず量と質とを併有するので別れて四種の命題となるのである。表を以て示せば左の如くである。

- (一) 全稱肯定命題 $\parallel A$ 凡ての S は P なり
 - (二) 全稱否定命題 $\parallel E$ 凡ての S は P にあらず
 - (三) 特稱肯定命題 $\parallel I$ 或る S は P なり
 - (四) 特稱否定命題 $\parallel O$ 或る S は P にあらず
- 次に命題の對當とは同一なる主辭と賓辭とを有して、而も質と量とを異にする A E I O の四命題の相互の關係をいふのである。左に示したる圖式は其の對當を顯はしたものである。



この對當に就て四個の法則が得られる。

- (一) 反對對當 — 兩者同時に真なるを得ず、兩者同時に偽なるを得。例へば凡ての露兵は臆病なり、凡ての露兵は臆病にあらずといふ二命題は共に真なる事は出来ぬが、事實に於て或る露兵は臆病であつても、或る露兵は臆病でないといふ事を許すならば、即ちこの命題の量と質とを變へて考へて見る時はこの二命題の共に偽なることが得られるのである。

- (二) 小反對對當——兩者同時に眞なるを得、兩者同時に偽なるを得ず。(以下例略)
- (三) 矛盾對當——一は必ず眞にして、同時に他は必ず偽なり
- (四) 大小對當——兩者同時に眞又は偽なるを得

四 左ノ三氏中一人ヲ選ビテ其教育説ノ大要ヲ記セヨ

スベンサー ルンジー ヘルバルト

ルンジーは民約論を著した佛蘭西革命の鼓吹者として多く世に知られて居るが、氏の唱道した教育説は實にスベンサーやヘルバルトの教育説の基礎を爲したものである。氏の教育主義に以爲へらく、兒童の心は生得に善なるものであるから之を自然に放任してさへ置けば必ず善良なる人となるべき筈である、其の然らざるものは人爲的に之を曲げ、之を汚し、之を毀損するからである。人の性は善であるけれども如何にせん家庭も社會も皆醜惡であつてこの純潔玉の如きものを感化して醜惡不良のものとなすのである。されば教育の要務は唯人間の天性の自然に發育開展する道に横はつて居る妨碍物さへ除去すれば足れりである、故に教育は消極的でなければならぬと。即ち氏はこの自然主義を以て、其の小説の主

人公エミールは父母なき孤兒で、而も社會と離隔して只一人の教師に養成せられたものと爲した。

先づ氏はエミールの教育に年齢に依て四期を劃した。第一期は出生より談話期まで、第二期は談話期より十一歳まで、第三期は十二歳より十五歳まで、三年間、第四期はエミールの十五歳に達してから二十歳までとした。で第一期を體育期として専ら自然といふ教師の指導の下に置いて、成丈け人爲的の干渉は避けなければならぬといつて、自然主義を極端まで推擴した。第二期では感覺を訓練する事を以て主たる務とし、單に實物を以て初步の理學的知識を啓發すべしと説いたが、眞の智育は第三期を以て充つべしと爲たのである。而して其の智育といふものは純然たる實利主義であつて、生徒に何事を知らしむべきかといふ事を標準とせずして何事が生徒に有用なりやといふ事を標準とすべしといふのであつた。かくて氏が德育を第四期まで延期したると、同情仁愛等の徳性を讀書算術の如く教授すべしとしたのは、最も吾人の了解に苦む所であらう。

抑々氏の教育主義は今日より見て其の幼稚な事は勿論であるが、教育といふも

のを白紙に字を書くと同様なものと考へ、先天性を無視した當時の教育説に對して大なる教訓を與へたのと其の實物教授を首唱したのは其の功の没すべからざるものである。而してエミールの四期を別けて智徳體育を區劃したのは甚だしい誤謬であるが、教育が心性開展の順序と時期とに注意を拂つたのはさすがに先見と謂はねばならぬ。唯其の自然主義の一方に偏して人爲を無視し、教授の重んずべきを知りて周圍の感化を忘れたのは批難すべき點である。がこれは當時佛蘭西の腐敗した社會制度の惡むべき厭ふべきことを痛く感じて早晩一大革命あるべき事を豫期した氏の根本思想の影響であつて、又止むを得ぬ事として許さねばならぬ。

五 形式的陶冶ト質的陶冶トノ意義ヲ明ニシ其調和ヲ必要トスル所以を論ゼヨ
 品性の陶冶は完全なる人格を形成するといふ教育の目的を達する手段であつて、之を形式的陶冶と質的陶冶との二側面に別けることが得る。形式的陶冶とは、人格修養の第一段階に來るべきもので、道徳的知識が未だ幼稚で自己を支配する所の道念の確立せぬ時に當つて外的に施す所の訓練である。即ち道念發達せず、

意志の薄弱なる時期に於ては、善惡を區別する所の觀念に乏しきが上に善を知りながら行ふこと難く、惡を知りつゝ避け難き状態に在り、且往々感情に駛せ執拗に陥りて、習慣常套の如き社會の制度を無視し、禮儀典型に無知なる等よりして、一切の道徳的過失、罪惡、習癖等を醸成するものであるから、この時期に於ける陶冶は、客觀的の法則即ち規律に服従せしめる事であつて、倫理的觀念の開發といふよりは、盲從的機械的に服従せしめて習慣上より善き品性を形成するのである。

質的陶冶は品性陶冶の第二段階であつて、形式的陶冶が他律的服從的であるのに反して之は自主的自由的である。彼に在ては、唯義務を義務として命令的に若しくは強制的に實行せしむるのであるから、其意向インテンションと否と、其意味を了解するアンダースタンディングと否とに拘はらないのであるが、此に於ては、主觀的に其意義を了解せしめ、道念の確立を謀り、道徳的知識の開發を企圖するものである。随つてこの期に於ては前の命令的なるに反して教訓的に前の干渉的なるに反して自由的に前の盲動的なるに反して知的である。故にこの質的陶冶に於ては、明確なる義務の觀念を與へ、道徳的事實に對する判斷力を養ひ、言行は必らず致一を得る事を期すべきである。

併しこの客觀的服従と主觀的自主とは早晚調和せねばならぬ。即ち客觀的の制裁即秩序と調和した自由でなければ眞の自由でなく、又主觀的に道念の發動から出た禮儀でなければ眞の禮儀でない。換言すれば一舉一動客觀的の規律に合すると同時に其れは主觀の性格から自然に流露したものでなければならぬ。かの徒らに容儀風采を装ひ、外面に正直慈愛を飾りながら裏に殘忍輕薄なる者は、この内外兩側面の調和しない結果である。かの心の欲する所に随つて矩を踰えずといふのは、内外の調和を得た状態であつて、吾人の行爲は必ずこの境地に達せんことを期せねばならぬ。畢竟この主客の兩側面は同一なる倫理的行爲の異相であつて、これが具足圓滿して始めて吾人の性格を形造るものである。蓋し心身の關係は密接であつて、主觀的情操は必ず其れと適合したる客觀の表現があり、又客觀的の動作は必ず心に感化を及ぼして之に適合した心的状態を喚起するものであるから、其孰れに偏しても高尚なる性格を養成することは出来ぬ。之を精神發達の順序より考へれば、第一段階の形式陶冶は感覺的であつて、幼童期より少年期の初半に及ぶべく、第二は悟性的であつて、少年期より青年期の初半、第

三は理性的であつて、青年期以上に及ぶものである。

六、教育上養護、教授、訓練ノ主タル務ヲ明ニシ其相互ノ干係ヲ説ケ

養護の主たる務は身體自然の發育を補助し、筋骨を均整的に發達せしめて、一は服食住居に注意して外的の障礙に對して身體を保護する事を知らしめ、一は筋骨を練磨して積極的には是等の障礙に打克つ所の體力を得せしめ、以て有爲の材幹を養成するに在る。教授の主たる務は知識を開き、技能を授け、人の人たるべき義務の觀念を與へ、又生活の道と處世の法とを知らしめ、進んでは發明發見等の學理的研究の歩を造るのである。又訓練は主として情意の上に感化を及ぼして、優美高尚なる情操を養ひ、意志を訓練して、誘惑に克ち理想を實現するに足る程の剛健なる性格を得しむるに在る。

上に述べたやうに、養護、教授、訓練は特殊の務を帯んで居るが、其相互の干係は甚だ緊密で、到底分離することの出来ぬものである。先づ教授と養護との干係に就て見ても、活潑なる精神は健全なる身體に宿るといふ様に、身體的の條件が具備せなければ到底教授の効果を收むることが出来ぬ。のみならず、斯る教授は身體の組

織に悪き影響を及ぼすものである。かの脳の負擔に堪えざる過重なる教授を課して身心を傷害するが如きは、この適例であらう。次に訓練の主とする所の情念の作用と養護とに見んか、かの品性の重要な部分を占める氣分なるものは身體の影響から來るものである。感情に脆き意志の薄弱なる若しくは世を悲觀し又は樂觀する等も皆身體の状態と適應するものである。

而して教授の務たる知的教育が單に知識を知識のままに止まらしめて、之を情意の上に影響せしめて實行に顯はれしめなかつたならば、其れは人格の修養上何等の効もないのであらう。吾人が體育を重しとし、知育を要とするのは苦難に堪え、壓迫に屈せざる所の勇健なる體力と、透明にして確實なる道義的識見とを有して、富貴にも心を移さず、威武にも志を挫げない所の雄大にして不屈不撓なる性格を陶冶するに當て始めて其の目的を達したものと云はれやう。

國語及漢文科

(明治三十八年八月廿六日施行豫備試験)

種村 宗八 述

文法

一、左ノ文ヲ文章法ノ上ヨリ解剖セヨ。

(イ) 牛にひかれて善光寺参り。

(ロ) 花より團子。

(ハ) 人間萬事塞翁が馬。

(擬答) (イ) の「牛にひかれて善光寺参り」は、「老婆牛にひかれて善光寺参り(を(なす))」の畧なること明なるが故に、其の略語を補ひて解剖すること左の如し。

主部

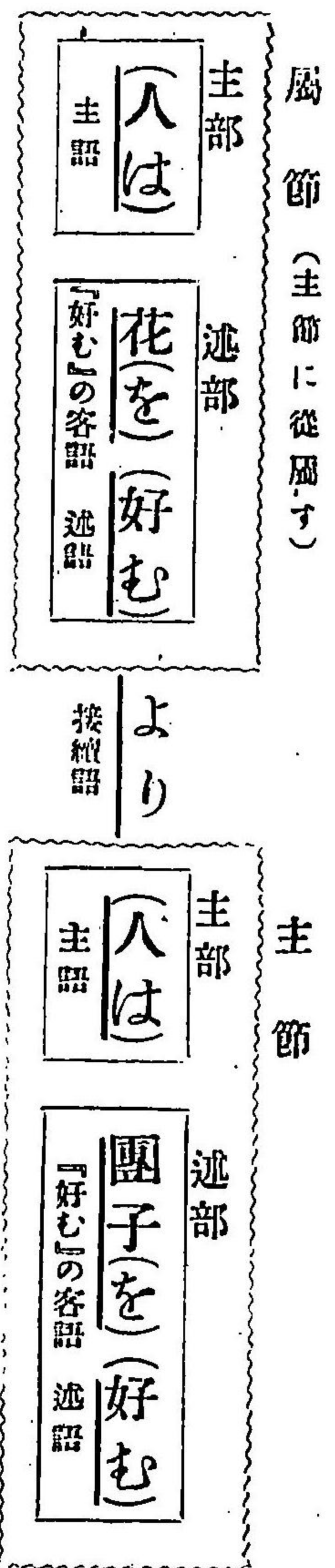
述部

主部
【老婆】

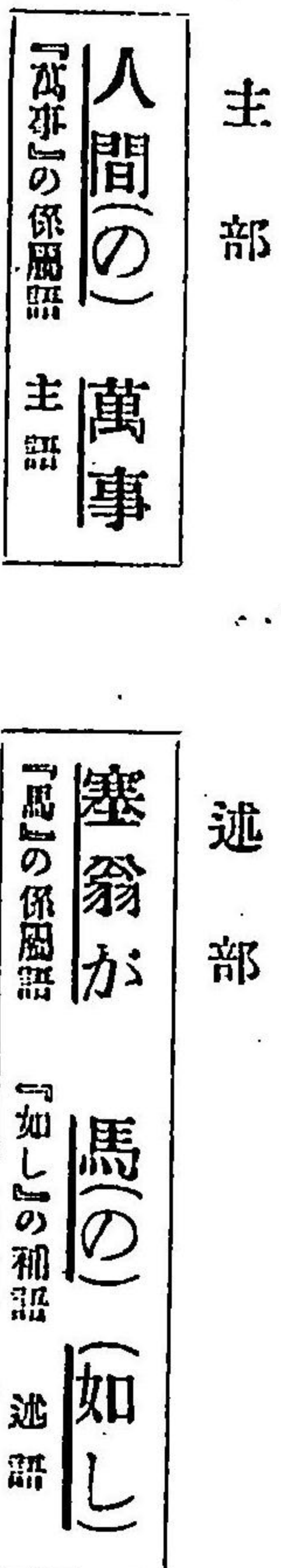
述部
【なす】の係属語
牛にひかれて 善光寺参り(を) (なす)
【なす】の答語
述部

(ロ) の「花より團子」は「花より團子(を)好む」の略なれば先づ之を補ふ。而かも尙ほ

主語一つの述語一つ省略しあるが故に悉く之を補ふ時は、『人は花を好む』より『人は團子を好む』となるべし。さて此の文は、『人は花を好む』と『人は團子を好む』との二節より成りて、其の主要點は後者にあるが故に、後者を主節といひ、前者は主節に從屬するものなるが故に、之を屬節となす。而して『より』は比較の意を有する接續語なり。さて之を解剖すれば左の如し。



(ハ)の『人間萬事塞翁が馬』は、『人間の萬事塞翁が馬(の)如し』の略なれば、先づ之を補ひて解剖すること左の如し。



(備考) 文(Sentence)の最も簡單なる者は一の主語(Subject)と一の述語(Predicate)とより成る。【鳥(主語) 泣く(述語)】の如きこれなり。主語と述語との外に客語(Object)を伴ふ者あり。【太郎(主語) 書を(客語) 読む(述語)】の如きこれ也。又補語(Complement)を伴ふものなり。【小兒(主語) 大人に(補語) なる(述語)】の如きこれなり。(大槻博士の廣日本文典にては、此處に所謂客語と補語とを合して客語といへり)。主語、述語、客語、補語の四つは文の主要語なれば、文中より之を削り去る時は、全く意を爲さざるものなるべし。

文には、主要語の外に、主要語に係屬して、それを修飾し制限すべき係屬語(Adjunct or Modifier)を伴ふとあり。【男まじき軍人】は形容詞を伴ふもの、【國家の干城たるべき軍人】は形容詞を伴ふもの、【速に走る】は副詞を伴ふもの、【草駄天の如くに走る】は副詞句を伴ふものとす。文は或る主題につきて既述するものゆゑ、主題となる部分を主部といひ、既述となる部分を述部といふ。一つの主部と一つの述部とより成る文を單文(Simple Sentence)といふ。たゞ單文の重りたるのみにて主従の關係なきものを重文(Compound Sentence)といひ、其の重りたる文を各々同位節(Co-ordinate Clause)といふ。【花笑ひ(同位節) 蝶舞ひ(同位節) 鳥歌ふ(同位節)】の如きこれなり。もし單文の重りたるものが、主従の關係を有する時は、之を複文(Complex Sentence)といひ、其の主要部を主節(Principal Clause) 其從屬部を屬節(Subordinate Clause)といふ。【雨降りて(屬節) 地面まる(主節)】の如きこれ也。この單文、重文、複文等の名稱も、其の分ち方も、學者によりて其の既まちくなり。必しも泥むべからず。要は文の組織を明にするに在る也。

二、左ノ文ニ誤謬アラバ正シ且ツ其理由ヲ記セ。

(イ) 貝ども拾ひつゝうちさはぐ程にやがて汐みつる頃となれば飽かず口
おしけれど返りぬ。

(ロ) 火曜と木曜の午後は在宅に候得ば御開も候はゞ御來車被下度候。

(ハ) この地海に近く白帆を青松の間に隠見して風光絶佳なり。

(ニ) 人に命じて書かしたれば誤もやあらん。

(擬答) (イ) の「うちさはぐ」は「うちさわぐ」の誤り、「口おし」は「口をし」の誤りにして、
何れも假字遣ひの誤りなり。

(ロ) の「火曜と木曜の午後」は「火曜日の終日」と木曜日の午後との意にも解せられ、又
「火曜日の午後」と木曜日の午後との意にも解せられて甚だ曖昧なり。これ接續の
用をなさしむべき」とは、其の接續すべき語の下に、幾處にても加ふべきものなるを、
誤脱せるによるなり。故に改めて「火曜と木曜との午後」となすことを要す。

「候得ば」の「得」は「え」の宛字なるが「候えば」と也行に活用することは「候ふ」の語にはあ
ることなし。「候ふ」は波行の活用語なるが故に「得へば」と改めざるべからず。

「御來車被下度」は「御來車被成下度」御來車なし下されたくの宛字」と改むることを
要す。此の「下され」は動詞の下に附きて動作を敬ひいふ時に使ふ助動辭なるに、此
の處にては直に名詞の「御來車」を受けて動詞と見るべきものなし、これ動詞なし」を
加へて「御來車をして下されよ」といふ意味にせねばならぬ所以なり。

(ハ) の「白帆を青松の間に隠見し」は「を」を削りて「白帆青松の間に隠見し」と改むる
ことを要す。「隠見し」は隠れたり見えたり之意にて自動詞なるが故に主語なる「白
帆」の下に他動詞の目的格を示す助辭「を」を置くべくもあらざるなり。(白帆を隠
したり見たりする意にあらざればなり)。

(三) の「書かしたれば」は「書かせたれば」又は「書かしめられたれば」と改むることを要す。
「書く」といふ動詞は其の將然段なる「書か」より使役の意を有する助動詞なる「す」と
「しむ」とに接續して「書かず」「書かしむ」とは使へども「書かし」と使ふことなし。さ
ら「す」と「しむ」との活用のさまは左の如し。

せしめ(將然段) しめ(運用段) すしむ(終止段) する(連体段) すれしむれ(既然段)

かくて此の二助動詞が過去を示す助辭の『たり』に接続するは其の連用段なる『せ』、『しめ』に於てするなり。故に之は『書かせ』又は『書かしめ』ならざるべからず。

作文

甲、左ノ口語文ヲ普通文牒ニ書キ改ムベシ。

輸卒歎

ア、これも御國の爲で御座います私は香川縣木田郡木太村の百姓私の父は今年七十一の高齡母は五十九歳しかも父は年のせいで早や目のみえぬ片輪同様母は二三年前から淺ましい精神病に罹つて年とともにつづのるばかり兄弟は一人欠けて外に五人も御座いました何が何の因果か揃ひも揃つて箸にも棒にもかゝらぬヤクザ者家出をするやら破落漢の仲間にはいるやら總掛りて親泣かせをするばかり其様な次第故貧乏も一通りてはなかつた事を御察し下さい今度の動員令でいよく赤紙が廻りました際も家中殆ど途方に暮れたやうな譯先づ村役場から貰つた七十錢の旅費を割いて五合の酒を買ひ心ばかりの別の盃を取交せました其

外にまた十五錢といふものは跡に残るもの、明日の食料に置いて行かねばならず残の三十錢を懐にして村を立ちましたが流車賃十八錢をとられて手に剩すは僅か十二錢所が泣面に峠とは此事でせう其うちの十錢をば何處へどうしたか失くしてしまひ倒に振つても二錢銅貨一つさりになりました夕飯が喰ひたくも二錢では喰はせては呉れませぬやつとある農家へ入つて拜むやうにして一椀の飯にありつきました漸く兵營に入つて三度の食事は不自由なく喰べられるやうになりましたがさて忘れやうとしても忘れられないのは家に残した兩親の身の上素より半文の貯もあらう筈が無い瘦腕ながらも稼人の私が取上げられてしまふ明日からは干乾になるより外はありませぬあゝ思ふまい、御國の爲に軍に行くものが今更其様な女々しい泣言を繰返してもどうなるものかと思ひきらうとすればする程猶思出される辛さ情なさ(中)運命拙い人間はどこまでも人並には行かぬものと見えます私共が師團○○○列に編入されて遼東に上陸してからの難澁といふものは到底言語には盡されずなまじ申して見ても同じく輸卒となつて戦地に行つて居る方の親や兄弟に氣を揉ませるが落ちてすからイッソ何事も申

しますまい唯少さいから貧乏に育つて骨折業には慣れて居るつもりが勤務中前後十二三回も卒倒したといふので大概御察しがつくてせうそれが爲終に先月の二十三日後送せられてこの廣島豫備病院に今は手厚い御手當を受けて居りますどうせ碌な死様も爲まいとは思ひましたが一度決心した身があちらの土にもならず空しく病院の喰ひつぶしとなつて御國の爲どころか御國の煩となる口惜しさを御察し下さいア、これも腑甲斐ない身の當然の運命といふも恐ろしく重輸卒が軍人ならばと唱はゞ唱へ自分ではこれでも軍人の端くれのつもりア、もう言ふまい何も聽いて下さるなたいこんな人間でも御國の爲とならばどんなつまらぬ死様でもして御覽に入れるだけの覺悟はあるものと御思ひ下さい(日本新聞)

(擬答) 嗚呼痛ましきかなこの境遇。しかもこれ國家のためなり。余はた之を如何にせんや。予は香川縣木田郡木太村の農夫なるが父は七十一歳の高齢に達し、母は五十九歳となれり。父は老衰のために明を失ひ、今は殆んど盲目にも等しきに、母は數年前よりいふにも忍びざる精神病に罹りて、病勢年とともにいやますのみ。兄弟はもと六人なりしが、一人失せて今は五人なるに、何れも言語に絶えたる

ものどもにて、或は家出を爲し、或は無頼漢の群に入り、相合して父母を苦め、父母をして悲嘆に沈ましむるのみ。かゝれば我が家の貧窮の世の常ならぬことは察するに難からざるべし。故にこの度動員令下りて、赤符の送附を受けし時の如きは、一家茫然として爲す所を知らざるさまなりしが、さりとて召集には應ぜざるを得ざるなり。是に於て、村役場より受けたる七十錢の旅費より二十五錢を割き、五合の酒を購ひて心ばかりの別盃を酌みかはし、更に十五錢を割きて父母が明日の糧の料とし、残る三十錢を懐にして村を出でしが、汽車の切符に十八錢を費したれば、剩す所は僅に十二錢あるのみ。泣面に蟬とは此の事なるべし。囊中の十二錢なるだに心細きに、其の中の十錢を失ひて、如何に搜るも、二錢銅貨一枚の外はあらざりき。今は只二錢を有するのみ。何によりてか晩食の費を辨せん。是に於て、恥を忍びて一農家に入り、一椀の食を拜受し、からくも飯を凌ぎて兵營に着することを得たり。さて、兵營に入りてより、三食には、もはや事缺かざるに至りたれども、尙夢寐忘れ難きものは家に残れる父母の身の安否なり。家固より貧にして半錢の貯蓄もなく、只予一人の微力によりて辛うじて一家の口を糊するたりしなり。然

るにたゞ獨りの稼ぎ人なる予は斯の如く召集せられたれば誰かまた父母を養はん。父母は何によりてか其の露命を繋ぐべきぞ。嗚呼思ふまじ思ふまじ國家のために出軍する身の今更女々しき泣きごとを繰返すもいかゞはせんと思ひ明めんとすれば却つていやましに思ひ出ださゝこそ悲しけれ(中)運命拙き者は何處に到るとして薄命ならぬは無きものと見えたり。我れ等が師團〇〇列に編入せられて遼東に上陸してより後の困難は到底言語に盡すべくもあらず。若し強ひて之を語るも戦地に行きたる輸卒の父兄をして徒に憂ひを増さしむるに過ぎざるべし。寧ろ言はざるの勝れるには若かざるなり。今は何事をも言はざるべし。而かも只一事の告げざるを得ざるものあり。予が如く幼時より貧家に育てられ力役には頗る慣れたりと自信する者が勤務中に十餘回も卒倒せしと是れなり。此の一事以て其の他を推すべし。予は之がために先月の二十三日に送還せられ此の廣島豫備病院に在りて斯くも懇篤なる介抱を受くるに至りたり。薄命予が如きものいかで名譽の死を遂ぐるを得ん。たとひ死せんも犬死たるに過ぎざるべし。かくは思へども一たび意を決して戦死に赴きたる者が彼の地の土とはな

り得ずして空しく送還せられて病院に寄食し國家を益せんとする素志に反して却て其の煩累を増すに至れるこそ悲しけれ。請ふ予が衷情の切なるを察せよ。思へば是れ亦薄命の自ら然らしむる所ならんのみ。斯く言ふもまた愚痴ならんのみ。輜重輸卒が軍人ならばと歌はんと欲するものは意のままに歌へかし。たとひ人は予を罵りて何と呼ぶとも予自らは軍人の末班を穢せりと信ずるなり。されど今は何事をも言はじ。君また問ふこと勿れ。予不肖と雖も國家のためにはいかでか一命を惜まん。甲斐なき死をも甘受せんとする決心は慥にあるなり。願くは之を諒せよ。

乙、左ノ四問ヲ漢文ニ意譯シ且ツ其答ヲモ漢文ニテ記スベシ。

(一) アナタハオイクツデスカ。

(二) ドコカニオ勤メデスカ。

(三) ドコデ國語漢文ヲオ學ビニナリマシタカ。

(四) 御愛讀ノ書ハ何々デスカ二三種オ書キ下サイ。

(注意) 女子師範學校、師範學校女子部、高等女學校ノミノ教員志願者ニハ(乙)ヲ課セズ
文法作文ヲ通シテ四時間トス

教員檢定試験問解答 第十八回國語及漢文科豫備試験の一

(擬答) (問) 大兄年齒幾何。

(答) 小弟馬齡方算三十。

(問) 大兄奉職於何處乎。

(答) 小弟承乏於某校教諭。

(問) 大兄於何處學國語漢文乎。

(答) 小弟嘗在某校學之。

(問) 大兄平生所愛讀何書。垂示其二三。

(答) 小弟平生好讀史傳。如○○○○○○○○○○此其所最嗜。

國語及漢文科

(明治三十七年八月二十七日施行準備試驗)

種村宗八述

解釋

一 すさまじきもの。 晝ほゆる犬春のあじろ人の國よりおこせたる文の物
 なき京のをもさこそは思ふらめどもされどそれはゆかしき事をもかさあつめ
 世にある事を聞けばよし人の許にわざと清げに書きたてゝやりつる文の返事
 見む今は來ぬらむかしとあやしくおそきと待つほどにありつる文のむすびた
 るもたてぶみもいときたなげにもちなしふくだめてうへに引きたりつる墨さ
 へさえたるをおこせたりけりおはしまさゞりけりとももしは物忌とてとり入
 れずなどもてかへりたるいとわびしくすさまじ。(枕草紙)

(擬答) (大意) これは興の醒めることの種類を挙げたのである。

(語釋) ○すさまじきもの。興の醒めるもの、即ち案外で不興に感ずるものを列舉したのである。○晝ほゆる犬。夜吠えるなら善いが、日中に吠える犬は感心しな

い。○春のあじろ。あじろは網代。大きな四ツ手網を河の中央に張つて魚を取るに水上に兩岸から杭など打ち列ねて、だん／＼と狭くし、其の狭いところへ網を垂れて下つて来る魚が、おのづと網の中へ入るやうに仕掛けたもの。此の頃は冬時には宇治川などに網代をかけて氷魚を捕つたのを京都から見物に行つたといふことである。春に網代をかけるのは、時節後れて、宛も六日の菖蒲、十日の菊の類だ。それで興醒める者の一つに算へる。○人の國よりおこせたる文の物なき。人の國は地方のこと。地方の知人からよこした文に、何を珍しい物が添へて有らうと思つて、披いて見ると何物もない。これも興の醒める一つ。○京のをもさこそ思ふらめど。京の人が地方の知人へ文を送つた時にも、左様に思ふて有らうけれど。○ゆかしき事。奥ゆかしく面白き事。○世にある事を聞けばよし。當世にあること、即ち京都にしか／＼の事があつたと云ふ事を、其の文で知ることが出来るから、それで善からう。地方の人は、文に物が添へてなくとも、左程には不満足には思はないだらうといふ意。○わざと清げに書きたて。わざ／＼念を入れて美しく書くと。○來ぬらむかし。もう返事が来るだらうと思つて、待つてゐること。

と。○かしは希望の助辭。○あやし／＼。不思議に返事が遅いと思ふこと。○ありつる文。こちらから持たせてやつた手紙。○むすびたるも、たてぶみも。むすびたるは結び文のこと、手紙を細長く折つて、其の上の方を結んだもの。「たてぶみ」は「立文」で、手紙を長細く疊んで、其上下を折返したもの。結び文にもせよ、立文にもせよといふ意。○いときたなげにもちなし。ひどく粗末に取扱ふこと。殊更に注意して美しく書いた手紙を、きたなげに持ちなすから、興が醒めるのである。○ふくだめ。皺だらけにすること、揉めてブク／＼になつてゐるのをいふ。○うへに引きたりつる墨。結び文の結び目には、封じた印として墨で棒を引いたものである、その墨をさしていふ。○おはしまさうりけり。先方の人が御不在であつた。これは使の者の口上。○物忌とてとり入れず。物忌中であるからとて、手紙を受取らない。これも使の者の口上。當時は謬信の盛な時代であつたから、天一神の遊行する方角を、ふたかりと稱して之を避けて、一日或は若干日の間、家にもつて謹慎したものである。物忌中には如何なる事があつても人に面會しない。○わびし。その意を得ざること、面白からぬこと。

通釋 興の醒めるものを擧げてみよう。(一)日中にワン／＼吠えたりする犬。(二)時節後れの春網代。(三)地方の知人から送つてくれた手紙に、何ぞ珍らしいものが添へて有らうと思つて、披いてみると、案外に、何も添へてないのも興が醒める。京から地方へ送つた時にも、地方の人は同様に思ふだらう。けれども、京から送つた文には、興ゆかしい面白い事が書き集めてあつたり、又、京都にしか／＼の事があつたなどいふことが書いてあるから、それで善からうと思ふ。地方の人は手紙に添へ物が無くとも、京の人ほどには興醒めはしないだらう。(四)人の許へ、わざ／＼注意して美しく認めて手紙を持たせてやつて、其の返事が見たいも、うくるかしら、不思議に遅いことぢやと、待つてゐる時に、こちらで持たせてやつた手紙を、結び文にもせよ、立文にもせよ、ひどく粗末に取扱つて、皺くちやに致したばかりではなく、結び文の上に引いた墨も、靡れて消えてしまつたのを、持ち歸つて、あの御方は御不在でありましたとか、又は、物忌中ぢやと申して受取りませぬとか云つた口上を聞いた時などには、殊に興の醒めるものである。

二 (イ) 我等がことは世にかくれなしあれ見よ河津が子供こそ敵をのがれんと

の出家正しく弘法のためならずと同宿も思ひいやしまば心も染まぬ墨衣の浦島が子の箱根寺にて明暮くやしと思ふならば中々俗には劣るべし。

(詠曲小神曾我)

(ロ) いざ／＼さらば琴のねに立て、もしのぶ此思ひせめてやしはし慰むと
かさならず琴のよのづから秋風にたぐへば鳴く虫の聲も悲みの秋や恨む
る戀やうさ何をかくねる女郎花我も憂き世のさかの身ぞ人に語るな此有
様もはづかしや。(詠曲小夜)

(擬答) (イ) [大要] 曾我十郎祐成、五郎時宗の二人は河津三郎の子である。父が工藤祐経のために殺されたので、常に仇を打たうと願つてゐた。たまた／＼頼朝公の富士の牧狩があつて、祐経も、それに従つて行つた。曾我兄弟は此の機を外づかず、復讐の素志を遂げたのである。此の試問題は、兄弟が富士へ出立するときに、暇乞のために母の許へ参つたときの事である。弟の五郎は、母が出家になれと申ししを聞かざりしほどに、(詠曲の文)かねて勘當されてゐた。それで此の度、兄がつれて暇乞に來たけれども、母は、時宗がことを申さば、祐成共に御勘當(詠曲の文)といふ

しまつ。その續きに、それに時宗を法師にならぬとの御勘當たとひ仰せにしたがひ出家仕り候ふともといふ文句があつて、其のあとへ、地の文として、此の問題の文句が續くのである。その心持で讀んで頂きたい。

語釋 ○われら。十郎、五郎。○世にかくれなし。敵を打たうとつけ覗つてゐる事が世間に知れ渡つてゐる。○敵をのがれんと。敵の目を避けるため、即ち敵の注目を避けて、敵に油断させるためにといふこと。○出家。僧になること。○弘法。佛法を弘めること、僧になつて布教すること。○同宿。同じ所に宿るものこと。○心も染まぬ墨衣。墨衣は僧衣をいふ、意に投ぜざる僧衣といふこと、いや／＼ながら、餘儀なく僧衣を着けるのであるから斯くいふ。○浦島が子の箱根寺。浦島が、龍宮から箱を持つて來たといふ昔話がある。箱根寺の箱に引きかけて、斯く云つたのである。また浦島の浦は、墨衣の裏に引きかけていうたもの。○くやし。残念。○中々。却つて。○俗には劣るべし。俗人で居たのよりも、却て劣るといふこと、俗とは僧でないものをいふ。

通釋 我等兄弟が、父の敵をねらつてゐる事は、世間に知れ渡つてゐる。ア、見よ、

河津の子供のやつばらは、敵の目をのがれようために、坊主になつたのだ。決して布教のためではない。と、同寺に住む坊主たちも思つて、我等を賤しんだならばどうであらう。それでは、氣にも喰はない墨染の衣を着て、頭を圓くして、箱根寺に居たところで、その詮もない。「残念ぢや、くやし」と朝晩に思ふやうでは、却て俗人で居た方がよい。

(ロ) **天要** 小督の局は絶世の美人で、高倉帝の寵姫であつたが、平清盛の女が、中宮となつてから、清盛に忌まれて、嵯峨野の奥へ隠れてしまつた。帝は切に小督を慕はせられて、勅使をやつて、そのありかを捜らせられた。その時が、ちやうど、中秋明月の夜であつたので、小督は侍女と共に月をながめ、こし方、ゆく末を思つて、感慨に堪へかねて琴を奏した。此の問題の文句は、この處の地の文である。即ち小督の胸中を作者が叙したのである。

語釋 ○立てゝも忍ぶ此思ひ。琴を奏して、音には立てゝも、此の胸中の思ひの方は、一向に引き立たずしてしをれるといふこと。○琴のちのづから。琴の緒、即ち絃を自のオに引きかけいふ。○秋風にたぐへば。秋風の吹くにつれて、琴の音の

聞えること。○秋や恨むる戀や憂き。虫の音も物悲しさうに聞えるのは、虫もやはり秋を恨んで悲むのであらうか、或は又戀のかなはないのを嘆くのであらうか。○何をかくねる女郎花。くねるは曲るすねるなどの意。これは庭前の女郎花の風情を形容したのであるが、女といふ字に因んで、何をすねる女ぞといふ意味に引きかけてある。○憂き世のさがの身ぞ。さがは、ならはしの意、憂き世のならはしの身といふと。つらい事、悲しい事の有るのは、すべて憂き世のならはしである。我が身の上も、此のならはしに漏れないで、現に、こんな憂き目に遭うてゐるといふ意。さて、さがは小督の隠れてゐた嵯峨野に引きかけてゐたのである。

通釋 いざざらば琴をかなくてよと、琴を弾けば、琴の音は立つけれども、此の胸のうちには、一向に引き立たない。どうぞ、せめてもの事に、此の心配を暫時なりとも慰めたいものぢやと、琴をかき鳴らせば、其の音が颯々たる秋風につれて聞えて、何となく物悲しく思はれる。野原に鳴いてゐる虫の聲も、何となく、悲みを帯びて聞えるのは、何故であらうか。虫も秋を恨んで鳴くためであらうか。又は、叶はぬ戀を嘆くのであらうか。庭を見れば、曲りくねつてゐる女郎花があるが、なにも、そんな

にくねつたり、じれたりするには及ばぬてはないか、此の女といふ字のつく女郎花よ。今我れが、こんなにつらい境遇にあるのも、皆これ憂き世のならはしに漏れないのである。されば、なにも、すねるには及ばない。しかし、此の有様をば、決して、人に語つて呉れるな、人に聞かれても恥づかしいからう。

三 左ノ文章ハ本紙ニ句讀反點送假名ヲ附シ別紙ニ解釋ヲナスベシ。

- (イ) 徒善不足以為政、徒法不能以自行 (孟子)
- (ロ) 愛之能勿勞乎、忠焉能勿誨乎 (論語)
- (ハ) 博學而詳說之、將以反說約也 (孟子)
- (ニ) 不逆詐、不億不信、抑亦先覺者是賢乎 (論語)

本問ハ師範學校、中學校、高等女學校、教員志願者ノ考

擬答 (イ) 徒善不足以為政、徒法不能以自行

大意 有名無實の善や法やは、政治の用を為さぬといふことを述べ。

語釋 ○徒善。徒は空である。善の名はあつても、善の實の無いのをいふ。上に、有仁心仁聞、而民不被其澤とあるのが、即ち、これに當る。或る外國の帝王が、其の領内

の人民に、毎日一片の肉を食ふことの出来るやうにしてやりたいと言つた話がある。これは疑もなく善である。然れども、一片の肉を食ふとの出来るやうに、政治を施さなければ其の善は何にもならない、即ち徒善である。○徒法。空法である。即ち其の精神の無い法則である、形式一點張りの政治である。足利幕府の頃に徳政といふ布告の出た事が度々あつた。これは、租税の滞納を免除して貧民を救ふ精神を以て、一切の借銭借財を償還するに及ばないと布告したのであるから、最初は實際徳政であつたに違ひない。然るに、義政の時に至つては、奢侈の結果として用度の足れないところから、豪商から金銭を借り受けて、其の辨償に困難するやうになると、其の都度、徳政の布告を出して一切の債務を免除した。即ち義政は自分の債務を逃れるために、徳政の布告を出したのである。債務免除といふ形式は同じであるけれども、其の精神は、まるで別だ。是等が徒法のうちの一種であらう。

通釋 政を行ふには、先王の道に従つて、民をして其の仁政に浴せしめねばならぬ。法を布くには、先王の道に従つて先王の精神を以て、其の實の擧がるやうにせねばならぬ。然るに世に徒善徒法といつて、有名無實の善や法やがあるが、有名無實の

善は政治の上に何の役にも立たない。有無無實の法は行はれるものでない。

(ロ) 愛之能勿勞乎忠焉能勿誨乎

大意 眞に愛するならば勉めさせよ、忠ならんとするならば誨へよ。

語釋 ○愛之忠焉。之を愛し、焉に忠にしてと讀んでもよし、又、愛して、忠にしてと讀んでもよい。之も、焉も愛と忠との目的となつてゐるのであるが、之を省略しても文意には變りはない。支那文典に助辭的代名詞と名けてあるのは、このためである。「焉は上の之を軽く受けてゐるだけで、二字ともに意義上の差は無いのである。支那文典に委しい。朱註にも蘇氏の言を引いて、愛而勿勞、勞而勿誨、婦寺之忠也と書いてある。

通釋 人を愛したならば、其の人に、勉強させないで置かれようか。否々。愛に溺れて遊惰に暮らさせるのは、結局其の人の一生を誤らせるのであるから、眞に愛するならば、勉強させずには置かれぬ。人に忠ならんとしたならば、教誨忠告を加へずにおかれようか。否々。面従阿諛を事として、向ふの人に、非違の事があつても、之に訓誨を加へず、忠告もせず、置いたならば、向ふの人は、其の非違を改めて、善

人になることは出来ない。故に眞に忠ならんとするには是非とも訓誨忠告を加へずには置かれなす。

(ハ) 博學而詳說之、將以反說約也。

大意 博く學んで詳に説くのは、何のためであるかを説く。

語釋 ○**說約**。縮約したる精粹に説き到るともいふべきか、博く各方面の研究を重ねて、それを融會し歸納して、至約の地に説き到るをいふ。學者が博く學び、詳に説くのは、該博と緻密とに誇らうがためでは無いけれども、該博緻密といふ段階を経ないで、一足飛びに至約の地に達する事は出来ない。前提を委しく詮議してから推論しないと、折角拵へた結論に錯誤が出来る。正しい結論を得んがためには、緻密に前提を取調べねばならぬ。此の處も、この意に外ならぬのである。

通釋 學者が博く各種の事を學んで、詳細に、それを研究するのは、該博詳細に誇りたいといふ考であるのでない。此の研究の知識を基礎とし融會して、至約の地に説き到らうがためである。

(ニ) 不逆詐、不億不信、抑亦先覺者、是賢乎。

大意 賢者は妄に邪推することは無いが、能く其の情偽を覺ることを述ぶ。

語釋 ○**不逆詐**。「逆は、迎へると讀む。さて、詐を迎へるとは、對手の情偽が、まだ分らぬうちに、詐りてあらうと邪推するのであるが、此の邪推は、事を敗る基であるから、賢者は決して邪推はしない。○**不億不信**。「億は、ちもふと讀む。事の分らぬ前から、臆測すると、「不信は、上の「詐」と對したまてて、つまり同じやうな事を述べたのであるから、對手の不信と見たら善からうと思ふ、即ち約束上の背信、不信用などの意である。朱註に「不信、謂人疑己」とあるのは如何であらうか。

通釋 人に接するには、虚心平氣であるが宜しい。情偽の分らぬ前に、邪推するといふことは甚だ宜しくない。邪推は小人のやる事で、これが、凡て事を敗る基になるのである。對手が虚言をいふのであらうと邪推することも無く、又對手が違約するであらうと邪推することもなく、虚心平氣で人に接してゐるけれども、其の情偽を先づ覺るものは賢者であらうわい。

三 左ノ文章ハ本紙ニ句讀反點、送假名ヲ附シ別紙ニ解釋ヲナスベシ。

(イ) 君子深造之以道、欲其自得之也。自得之、則居之安、居之安、則資之深、資之深、則取

之左右逢其原故君子欲其自得之也 (孟子)

(ロ) 不曰如之何如之何者吾未如之何也已矣 (論語)

本問ノ女子師範學校、師範學校女子部、高等女學校ノミノ教員志願者ノ分、

〔擬答〕 君子深造之以道、欲其自得之也、自得之則居之安、居之安則資之深、資之深則取之左右逢其原、故君子欲其自得之也、

〔大意〕 學問は自ら悟るに至ることが必要であるといふことを述べ。

〔語釋〕 ○造之。造は詣ると讀む、之は道、即ち學問の精粹極所を指したものと見て善からう。○以道。朱註に、道則其進爲之方也とある通りて、この道は道德ではない方法であるから混同しないやうにするが必要である。學問の方法としては、躁急にして多きを貪るのは宜しくない。怠らずに徐々と進んで、十分に會得し、其の學んだ事が全く消化して我がものとなるやうにする事が必要の方法である。○自得。自分で合點すること、自分で悟ること。○資之。資は資本などの資で凡ての事の本をそれから取ること、資之深は、いくら取り用ひても、其本が深くして盡きないと。○取之左右。左右前後、どちらから取つてもといふと。學んで自得した事を日用行事に適用して、決して道に違はぬやうになるのを指していふのである。○原。源と讀む。

た事を日用行事に適用して、決して道に違はぬやうになるのを指していふのである。○原。源と讀む。

〔通釋〕 君子は學問をして道の本源に究め到るのに、其の方法を以てする。其の方法とは、躁急もせず、貪りもしないで、着々として進んで已まないことである。これは道の何たるかを自得したいと思ふからの事である。學問は人から學んだばかりであつて、自得しなければ、役に立つものでない。一たび自得した以上は、萬事に適用が出来て、しかも、それが、悉く道に叶ふやうになる。自得とは、學んだことを全く理解し消化して我がものとするのである。既に學んだ事が我が物となつてゐる以上は、其の上に安居することが出来て、決して究屈を感じない。其の道の上に安居することが出来れば、其の道を資として之を用ひるに、其の根底が深くして盡きることがない、即ち行きつまつてしまふことは無い。斯の如くであれば、前後左右から之を取つて日用行事に適用しても、必ず道の本源に逢ふのである。これは皆、自得の賜である。故に君子は自得することを欲するのである。

(ロ) 不曰如之何、如之何者、吾未如之何也已矣、

大意 審思熟慮して事を行はぬ者には教へやうがないといふことを述ぶ。

語釋 ○如之何、如之何。朱註に「熟思而審處之辭也」とある通りで、どう致したら善からうかというて、熟慮することである。○末、「無し」と讀む。○也已矣。三字で「のみ」と讀んで宜しいが、一字一字に別の意味を持つた助辭である。支那文典には是等の類を助辭的副詞と名けてある。此處では、上の「未」に附着してゐる助辭である。「也」は肯定の意を有し、「已」は有一無二の意を有し、「矣」は已定の意を有してゐる(支那文典に委しくある)。

通釋 どう致したら善からうかと、審思熟慮して事を行はぬで、何の考もせず、輕卒に事を行ふやうな者には、吾(孔子)も教育の致し方が無いにままつてゐる。

讀方及解釋

四 左ノ文章ハ本紙ニ句讀反點送假名ヲ附シ傍線ヲ施シタル處ヲ別紙ニ解釋スベシ。

好勝人……所通辭矣(通鑑)

本問ハ師範學校、中學校高等女學校教員志願者ノ分、四回ヲ通シテ四時間トス、

(擬答) 好勝人、恥聞過、明辯給、眩聰明、厲威嚴、恣驕、此六者君上之弊也。詔諫、願望、畏懼、此三者臣下之弊也。上好勝必甘於佞辭、上恥過必忌於直諫、如是則詔諫者順指而忠實之語不聞矣、上明辯必助說而折人以言、上眩明必臆度而虞人以詐、如是則下之願望者自便而切磨之辭不盡矣、上厲威必不能降情接物、上恣驕必不能引咎以受規、如是則下之畏懼者避辜而情理之說不申矣、夫以區域之廣大、生靈之衆多、宮闕之重深、高卑之限隔、自黎獻而上、獲視至尊之光景者、踰億兆而無一焉、就獲視之中、得接言議者、又千萬不一、幸而得接者、猶有九弊居其間、則上下之情所通辭矣。(通鑑)

解釋 ○上明辯必助說而折人以言。明辯は辯舌を逞しくすること。助說の勦は輕捷である故に勦說は口早に辯ずること、即ち懸河の辯を振ふと。さて此の一句の意は、人君たる者が、辯舌を逞うする事を好む人であると、必ず口早に辯じて、聽く者に閉口させねば止まぬであらうといふ事。○上眩明必臆度而虞人以詐。眩は街である明を街ふといふのは、己が賢明なることを、人に見せびらかして、自慢すること。「臆度」は臆測すること。「虞」の虞は慮である、測である、人がしかくならん

と當て推量をすること。さて此の一句の意は、人君たる者に、己が賢明を衒ふやうな癖があると、必ず、いろ／＼と臆測して、人が詐るのであらうなどと、途方もない當て推量をするやうになるといふこと。○如是則下之願望者自便而切磨之辭不盡矣。願望者とは様子を願み望んで去就するもの、主義もなく方針もなく、固より忠義の心などの有らう筈はなく、たゞ様子を願望してゐて、利益のある方へ就くもの、一口に云へば佞臣。自便は自ら便利とすること、即ち自慢癖のある人君の意に迎合することは甚だ容易であるから、佞臣は却て、それを自分の便利とするのである。切磨之辭は切瑳琢磨の訓辭である、修身その他の事に有益なる訓誨といふことで、忠臣の諫言などは、固より此の中の一つである。不盡矣は盡す者が無いに、さまつてゐるといふこと、即ち諫言を人君に向つて述べ盡すものはないといふこと。忠義の臣下が、一言二言諫めはじめても、人主の雄辯に閉口させられて、途中で止めてしまふからである。さて此の一句の意は、人君に自慢癖があれば、様子を願望して去就するやうな佞臣どもは、却てそれを自分の便利として、よろしくない事をする之れと同時に切磨の訓辭などを人君に向つて述べ盡すものは無いに、さまつて

ゐるといふこと。

讀方及解釋

四 左ノ文章ハ本紙ニ句讀反點送假名ヲ附シ傍線ヲ施シタル處ハ別紙ニ解釋ス
 ンシ。

霍氏謀反 萌於驂乘 (十八史略)

本問ハ女子師範學校、範師學校女子部、高等女學校ノミノ教員志願者ノ分、四問ヲ題シテ四時間トス、

(擬答) 霍氏謀反伏誅夷其族告者皆封列侯初霍氏奢縱茂陵徐福上疏言宜以時抑制無使至亡書三上不聽至是人爲徐生上書曰客有過主人見其窳直突傍有積薪謂主人更爲曲突速徙其薪主人不應俄失火鄉里共救之幸而得息殺牛置酒謝其鄉人人謂主人曰鄉使聽客之言不費牛酒終無火患今論功而賞曲突徙薪無恩澤焦頭爛額爲上客邪上乃賜福帛以爲郎帝初立謁高廟霍光驂乘上嚴憚之若有芒刺在背後張安世代光驂乘上從容肆禮甚

安近焉、故俗傳霍氏之禍萌於驂乘。(十八史略)

五四

「」は解し易からしめんために加へたのであつて、試験問題には無いのである。

○驂乘。陪乘と同じ意味で貴人に隨從して一緒に車などに乗ること。○若有芒刺在背。芒はのぎである。稻麥などの穂の先に出る剛い毛のやうなもの。刺はとげである。薔薇などの莖に出る針のやうなもの。これは芒や刺やが背に在るやうに、恐れてゐたといふこと。帝は霍光をひどく憚つてゐたから車に同乗すると宛も芒刺が背に在るやうに恐れたのである。

修身科本試験問題擬答 (三月十四日施行)

講師 市野彌三郎述

一 社會の進歩と道德との關係如何

人類の構成した社會は、或極點に達するまでは、絶えず進歩發展已まざるものであるといふことは、進化の法則が吾人に教へる所である。然らば社會の進歩とは何を意味するのであるか。或人は之を單純より複雑になる状態と見た、即ち人類の活動の貧少なる状態より、豊富なる状態に進むものと見た。又或人は之を社會が最も複雑に、最も變化に富める活動を包容すると同時に、其諸活動が最も適當に最も圓滿に、最も協同に活らく様に、有機的關係を以て組織せられた状態と考へた。是等の觀方は、現在ある通りの社會を、客觀的に見たものとして、又現在の社會より始源に遡つて、發生的に見たものとして、確かに一面の眞理を含んで居る。併し我々は、人類が社會を構成するに至つた欲望より、又社會に對する人類の目的より、他の觀方を取ることが出來やう。即ち吾人が欲望し、目的とする社會は、其要素たる

各個人の品性をして、最も圓滿なる發展を遂げしめる様に、都合よく組織せられた社會を以て、最も進歩したものと見做すのである。言葉を変へて言へば、進歩した社會といふのは、社會の組織が、一方には益々社會的となると同時に、一方には益々個人的となることである。即ち一方には益々協同的たると同時に、他方には益々個性的たることである。夫故に進歩したる社會に於ては、社會の鞏固を崇尚すると同時に、各個人の性格を尊重するものである。若し社會の進歩といふことを斯様に看來る時は、社會の進歩と道德の發展とは、協同的關係を以て活らくものと考へるのが至當である。

併し時として、一見すれば、社會の進歩が道德の發展を伴はぬ様に思はれ、若しくは相矛盾することさへある様に思はれることがあるが、それは一時的の現象であるか、若しくは吾人の誤解に基づくものであらう。先づ我々が記憶すべきものは、社會も矢張り個人がそれ／＼の特色を帯びる様に、或時代の或社會には、一種特有の色彩即ち風潮を有するといふことである。例へば或は哲學宗教を以て顯れる社會あり、或は文藝美術の盛んなる社會あり、或は武力の旺盛なる時代があつて、社

會の組織制度慣習等が多少の相違があるので、随つて人の思想を支配する所の道德も其趣きを異にして、餘程周到に的確に社會と道德との關係の點を攻査しなければ、正鵠を得た判斷を下すことがむづかしいのである。

尙一つの場合は、社會の過渡時代に於けるこの兩者の關係である。例へば或一國が外的の影響に依つて、國民の物質的若しくは精神的に著しい變化を及ぼした時には、一時的の現象として、道德が社會の進歩に後れる事もあらう。併しそれは唯一時であつて、兩者は早晚調和しなければならぬ必然性を有つて居るので、互に自己の形を他に當嵌る様に變更すると同時に、他を支配して、殆ど並行すべく接近するまでは已まないものである。されば或社會が外形上進歩した様に見えても、其に伴ふ所の道德なければ、其社會は退歩するか若しくは滅亡せねばならぬ。又如何に進歩した道德でも、其立つ所の社會に適合しないならば、道德が適合すべく變更するか然らざれば消滅すべきものである。

次に知識と道德との關係に就いて一言を費せば、或人は知識の進むに随つて道德は進歩しないで却つて退歩するものと考えた。併し是は知識といふ意義

の相違から來つたもので、知識が單に抽象的形式的のもので、實行に何等の交渉もないものとすればこの考へは正當であらうが、若し人の行爲は知識に依つて理想化され、人の知識は行爲に依つて完結されるといふことを思へば、換言すれば知は行の始めて行は知の終であるといふ知行合一を信ずる時は、確かにこの考への誤謬に陥つて居ることが解るであらう。

要之社會の進歩と道徳とは、永遠に其進行の歩調を一にすべきものであつて、一進一退時に先後を來すことあるが、詰りは完全なる人格を要素とした完全なる社會を造るのが其目的である。故に野蠻の社會にはそれに相應した道徳あり、文明の社會には又それ相應の道徳あつて、然して其道徳の價値に於ては高下なきもので、要は其社會の國民性を發展するに適當なれば足るのである。

二、良心は錯誤をなすものなりや。

若し我々が、先天良心説の説く處に従ふならば、良心といふものは其本來の性質として、決して錯誤をなすべきものではない。即ち彼等の考へにては、人は先天的に善惡を判斷する特殊の能力を稟けて居るので、一々の場合に於て之は善である

之は惡であるといふことは、商量を要せず、刻下に直覺的に間違なく判斷が出来ること云ふのである。併し我々は是とは大に觀方を異にして、我々は我々の所有る行爲は、衝動の間接化、即ち衝動が其結果を預想して相當の評價を附したるもの、更に約言すれば結果の反動を受けた衝動に過ぎぬことを信じ、又一面には吾人の心意活動は、何處までも其初期の状態に在るものではなく、習慣の活らさに由つて吾人の斷定即ち行爲は、必ずしも同一の經過を取らないでも、同一の斷定が出来る様になると同時に、行爲に一種の色彩即ち活動の傾向を形造つて、此處に品性なるものが生ずると考へるのである。此處では品性の形成が何時に始まるかといふことを問ふべき場合でない、唯行爲に於ける品性の發顯なるものは、我々の要因即ち斷定の主位となることが解ればそれで善いのである。

併し吾人の經驗即ち活動は、繼續的のものであるから、品性に就いて吟味するにも、他の活動から引き離して考へることは出来ぬが、今品性を發顯せしめた處の行爲の側面からして、品性及動機を反省的に吟味することが出来るやう。換言すれば、全體の自己から一部の自己を反省的に吟味することが出来る。然してこの反省

的に活らく心状態を我々は良心と呼ぶのである。故に良心が醒れるのは必ず新しい行爲に於てか過去の行爲を吟味する時であつて吾人が平常習慣的に遣つて居る行爲には醒れないのである。要するに良心に錯誤ありやといふことは吾人の行爲に過失あるかといふと同様であつて吾人の行爲に於て或意向した處のものが預想の出来ない或事件の爲に預想外の結果を来すことあるを免れない様に良心が認許する事と隨責する事とに拘はらず適く錯誤を来すことのあるのは言ふまでもないことである。若し良心が過失もなければ錯誤もなく固定的のものであるならば斯様な良心には進歩もなければ發達もなく變化窮りない精神活動已外に立つものとしなければならぬ。而して其様な良心は最早吾人の意志の力を以ては動かすことの出来ぬものであるから吾人の意識外に在る客觀的存在物と同様であつて斯かる良心が爲す所の如何なる行爲にも我々は責任を有することがないのである。

三、論語に所謂君子之於天下也。無適也。無莫也。義之與比と説明せよ。

此章は君子たるものゝ世に立ちて人を治め身を修むる上に就いて其實踐躬行

の工夫を説いたもので中庸に君子中庸小人反中庸云々といふ思想と源流を同じうする者である。君子とは有徳の君子であつて孔子が最高の理想至上の善と見た仁の徳を體現した處の人を指したもので最も圓滿なる人格の發展を遂げたものゝ稱である。抑仁といふものは諸徳の總名であつて普遍的のものであるから之を我々の個性的の行爲に實現しやうとするには其を指導し其を統御する所の他の力を俟たねばならぬ。換言すれば仁は我々が行爲の對象たり標的たるものであるから其處に到達しやうとするには必ず適當なる手段方法を取らねばならぬ。即ち孔子は仁をして單に抽象理想たるに止まらざらしめんとて其標準たる義といふものを拈出した。義は宜也と言つて事物の適宜なることを顯したもので取りも直さず中庸の徳之である。

即ち君子たるものは仁の徳を實現するに中庸といふ標準を以てする故に君子は偏することもなく黨することもなく盲目ならず固陋ならず必ず節に當り規度に合して行ふとして可ならざる所がないのである。されば曰く無適也無莫也と適とは適從の義であつて之を可とし之を肯定し是認して他くまでそれを支持す

ることである。莫とは不肯の意で、之を不可として否定し、非認して、何處までもそれを忌避することである。即ち君子は道もなく莫もなく、中庸に従ふのであつて、始めより固定的條文的の教理を立て、之を無理に變化窮りない我々の経験に當儀めやうとはしないのである。一體中庸義といふ辭は、儒教の中で仁と共に難解の一として數へられるのであるが、之を算數的の標準と見て、物の長短のない、過不及の中正を得たものと考へて、全く之を我々の精神活動から逐ひ出して、了つたなら、毫も意味のないものとなるのである。中とは我々の個々の経験が善く其境遇に適合した状態を言つたもので、我々の理想が實現する途中に在る處の商量選擇の活らさを言つたのである。若夫れ適とし莫として偏執頑迷ならば、我々の行爲は盲動ならねば、我儘勝手であつて、經驗の理想化は到底不可能である。加之斯くては、圓融無碍を以て其精神とする仁の徳の一部分すらも實現することが出来ぬのである。

四、日本の武士道とストア主義とを比較せよ

武士道は其發達の歴史に就いて觀察すれば、色々の観方がある、のであらうが、其

忠孝を重んずる點、即ち義務を尊ぶ點に於ては、確かに儒教の精神を受け継いだものと謂つて善からう。儒教に於ては、天理人道を同一にして、人道を盡すのがやがて天理に合するものと見たのであるが、武士道に於ても自己の職分を守つて主君に對して忠勤の誠を致すのは自己の天職であつて、即ち天徳の自然に合するものと考へたのである。此點に就いてはストアの思想も亦殆ど同様である。即ちストアに随へば、宇宙には秩序正しい法則といふものがあつて、其を意識するのは人間のみであるから、自然の法則に準ふのが人間の本分である。而して人間の特性は理性であるから、吾人の衝動の中で理性的の衝動に依頼して、非理性的衝動即ち感情の束縛を脱却するのが、自然に準ふ道であると見做したのである。

即ち義務を重んずる觀念と、義務の根本思想と宇宙の法則とを以て共通である、と考へた點に於て、ストアと武士道とが同様なる事は明白であるが、更に其實踐道徳の形に就いて見れば、大なる相違の點を發見することが出来る。ストアに在りては、其義務の觀念は單に自己の徳性を成さんが爲、有徳の君子たらんが爲に生じたのであつて、其天然に準ふのも詰り吾人の道徳を裨益するからなのである。即

ち彼等に於ては、自己を中心とし、自己に利益あるものと便利なるものが最も善い行爲としたのであるが、反之武士道に於ては、殆んど自己といふものは彼等の眼中に置かなかつたのである。武士道に於ては主君を天と崇めてそれに服従の義務を負ひ、主君に忠義を盡すのは自己の本務を遂行するのであつて、取りも直さず天の道に合するものと爲した。故に一身の利害得失は殆んど計算の外に置いて、一意専心忠誠を盡して死生をすら意としなかつたのである。

されば最も酷似せりと見える處の自殺論に就きては、武士道に於ては主君に對する義務を完全にせんとする觀念より、死を以ても其初一念を貫徹せんとし、遂に斃れて止むのであるが、ストアに於ては、個人の道徳的自由を保たんが爲には、外物の束縛を脱しなければならぬといふ處から、他に離脱の道なしと信ずる時には、自殺をも可なりと主張するのである。一言を以てすれば、人事を盡して天命に安んずるといふ勇猛心を以て、人間の義務に向つて精進し、生命財産等の外的善を輕視したる點に於ては、兩者の思想は殆ど同様であつて、ストアの個人性を重んじて國家とか社會とかいふ觀念を輕視したるに引きかへ、武士道が國家とか主君とかい

ふものゝ中に自己の個人性を全く没却して了つて、毫も自己の獨立を認めなかつたといふことが其相違の點である。

五、我邦今日の中等教育に於ける德育に就いて其得失を論ぜよ、

我々は今日中等教育(特に男子)の德育に就いては、其缺陷について多く語らねばならぬことを悲むものである。今の德育がかの専制制度の遺物たる盲目的服従、即ち無條件的服従を要求することを止めて、齟齬した學窓を開いて、自由の空氣を輸入したのは確かに德育の一進歩といふことが出来やう。實に之が爲に今日の子弟が漸く自己意識の醒覺を來して、自我の尊重すべきことを悟つたのであらう。長處は又短處の潜む處であつて、自由の極總ての秩序を無視する我儘勝手となり、自我を重んずる結果、主我的利己的の弊風に陥つたのは確かである。或は師道が衰へたと云ひ、或は人情が輕薄になつたと言ひ、或は愛國の至情乏しくなつたと言ふ様な事は、屢々今の中等教育の下に在る青年に就いての非難の聲であるが、是は四圍の影響即ち社會一般の風潮に薰染された結果も勿論多きに居るのであらうが、我々は一面に今の德育の不完に歸せざるを得ないのである。

中等教育に就いて尠しく注意を拂ふものは何人も氣の附くことであるが、それは學校の教育が餘りに形式的に、餘りに條例的に、餘りに理窟的であるといふことである。是は蓋し一旦緩めた統御の綱を引締めて、其放縱を矯めやうといふ積りであらうが、これが抑、誤解である。最早素朴なる小學期を去つて、欲望も相應に増して來、經驗も相應に富んで來、社會意識も幾分か發達し、所謂經驗の内容が既に乳臭い小兒よりは成年期により近い彼等を、意味もない形式主義を以て無理に或模様に倣め込まうとするのであるから、斯る德育は彼等をうそつきにするか、執拗頭迷の徒とするに非ずんば已まぬのである。

抑、我々が行爲上の過失が、道徳意識の發達せないのに基因することが多いと見るならば、今の德育に於て動機とか結果とか義務とかいふ事の稍、明了なる解釋を與へんとするのは其長處の一に數ふべきであらうが、是等の抽象的觀念が實行上何れ丈の價值があるかといふことは疑問である。今の德育に權威がないといふことは一般の學校教育に就いて言ふべきことであらうが、我々は特に中等教育に就いて一層痛切に感ずるのである。教師に生徒を感化する丈の徳望ある人のな

い事は今更言ふべきでもないが、學校全體として見ても、德育に關して何等の主義もなければ主張もなく、又抱負すらないのである。斯様な德育では子弟をして道徳の名の下に罪惡を爲さしめるのみで、無益にして有害である。

言ふまでもなく教育の目的は品性の陶冶であるから、學校全體が大なる人格であつて、學風といふ名の下に特殊の品性を有して、堂に上るものは不知不識の間に感化せられる丈の力がなければ、學校は單に學問教授處たるに止まるべきである。若夫れ今の德育に刷新を施すべき點を挙げれば、教師の選拔其一である。教科書の改造其二である。學校を統一あり精神あり主張ある一團體とすること其三である。家族制度を輸入すること其四である。初等教育と中等教育とを連關せしむること其五である。

明徳のあきらかなる君子は、義理を守り道を行ふ外には毛頭ねがふ事なく、欲心のまよひ少しもなきゆゑに、義理を立て、道を行ひ、主親のために命を惜まざる事やぶれたる屍をすつるが如くなれば、毛頭死をおそれ、生を食ふ心なし、然る故に天地の間にありても、恐るべきものなし。

(中江藤樹翁問答)

教育科

(明治三十八年二月十六日施行本試験)

講師 中島半次郎 閱

木原順一郎 述

一、如何にして視覺に由りて、物體の形狀位置及距離を認定し得るか。

(擬答) 視覺は感覺中最も多く吾人の用をなすものなり、此の感覺はもと色を知るに止まるものなるが、他の諸感覺と結合し遂に吾人に最も緊要の知覺を與ふるに至るものなり、即ち後には、毫も他の感覺の力を借らて只視覺のみにて物體の形狀位置及距離を認定し得る如く成り來るものなり。

さりと云へ、視覺は由來單獨に視覺其物にて物體の形狀位置及距離を認め得るものにはあらず、此の形狀位置及距離を認定せんには、必ずや觸覺の補助あるを要す。例へば物體の形狀に就いて云へば、唯視覺のみによる時は立方は平面に見ゆべきのみ、其の立方形の物體に觸れ見て始めて其の立方形たることを判知し得るなり。又位置に就いて云へば、小見には遠近と云ふことは、全く不明なるがため

に往々遠きにある物を掴まんとするが如きことあり、此れ全く小児は尙ほ視覺のみにてたよりつゝ未だ觸覺の力を借るに至らざるが故に距離の觀念皆無なるの狀態にあればなり。此の故に、視覺其物にて物體の形狀位置及距離を認定するは不可能のことにて、必ず手足の力が加はりて直に其の物に觸るゝと云ふことあるにあらざれば、決して其の形狀位置及距離を認めらるべからざるなり。

斯くの如く、視覺は初めは全く觸覺と連合したる上にて漸く物體の形狀位置及距離を認めうるものなるも、此の連合が漸々濃く密接なるやう練習せらるゝに従ひ、後には遂に全く他の感覺の代理をなし、毫も手足を動かさず一目直に物體の形狀位置及距離を正確に測知し驚くべき精密の計算をなしうるに至るものなり。教育者は茲に意を留めて、兒童の視覺をば此處まで發達せしむるやう計らざるべからず。

二、知識と意志との關係を論じ、教授上の注意に及べ。

(擬答) 知識は物を認識し、其の本質を究むる働きなり。意志は其の認識にて理解したることを實行するか、或は感情に動かされ、其の感情を満足せしめんとし、働

く所の心の働きなり。従て其の知識を離れたる意志は殆ど本能的若くは衝動的意志にして、知識が進めば進むほど其の意志は熟慮的となり又一定の行爲を取るに適する如くなるべし。

ソクラテースの如きは、知識明かなれば必ずや善き意志を起し徳行を爲すとさへ論じ、『徳は知なり』と叫びたり。蓋し彼は、當時の人の何事をもよく知らざるを認め自身もまた明白の知識なきを感じ、常に研究的態度を取り、『汝自身を知れ』てふ格言を以て學問の第一歩とせり。明白の知識即ち明白の意識なくんば事を處して事々物々失敗と誤謬とに陥るのみ、其の偶々成効するは僥倖たり。されば、吾人は須く明白の知識を持し其の悟るところによりて行爲すべく、茲に始めて眞の徳行は生じ來るなり。故に徳行の本は知見を開くにあり、明に徳の何たるかを知るにあり、誰か悪と知りつゝ、惡を爲すものあらんや、とは此れ彼が説きし所なり。更に又、ヘルバルトは、知識を練れば自ら興味を起さしめ、其の興味は自ら意志となりて表はるゝを以て、知識を練るは此れ即ち意志を練る所以なりと説きたり。

されど此のソクラテースの知行同一の説もヘルバルトの知識がやがて意志と

なると云ふ説も、共に此れ現今の心理學上よりは承認すべからざるものなるは勿論なるがさればとて、知識が意志の發達、又其の強弱に密接の關係あるは到底、否むべからざることなり。

歐陽明は知行合一の説を立て、知りたることは必ず行爲の上に表はるゝに至りて眞に知りたりと言はると述べたるが、吾人の主張もまた茲に存す、教授上に於ては知りたることは必ず之を意志の上に行はしむる如くし、以て知行合一の人格を作ることを志さるべからず。

三、遺傳が教育に及ぼす影響如何。

(擬答) 遺傳が教育に及ぼす影響を考ふるに、遺傳は近くは其の父母、遠くは其の祖先より傳はり來る先天的の力なるが故に、後天的の教育の力によりて、全く任意に之を左右せんことは到底不可能のことなり。されど、長年月の間、一定の案を具へて之を導かんか、必ずしも然らず、其の善き遺傳は益々之を延ばし、惡しき遺傳は之を發達せざらしむるを得べし、即ち教育は遺傳に對しては、積極消極の兩面より其の力を及ぼし、以て善良の好果を結び、うべしと云はざるべからず。

然るに遺傳の力は教育の力を以ては如何ともすべからざるものなりとなし、文學上の天才は之を文學者たりうべき境遇に置かずとも何時かは其の天才を發揮すと云ふが如き例をあげ、惡しき遺傳を有せるものは如何に善き教育を與ふるも之を助かすこと能はざると同時に、善き遺傳を有するものは教育の如何にかゝはらず、其の發展するを見るものなりとて、遺傳に對する教育の力の極めて薄弱なるべきを唱ふるものあり。されど、勿論其の惡しき遺傳の力は教育力に依りて全く消滅し得べきにはあらざるも、思ふに之を發達せしめざるか、或は其力を弱くすること、は可能のことに屬せざるべからず、たとひ如何なる天才にもせよ、之を發達せしむるの機會を與へざれば、其の遺傳の美才は發達すべからず。ゲーテが「天才も修養を要す」と云へるは蓋し此の意に外ならず、誰か遺傳の前には教育の無能なるを云ふぞ。されば教育者は詳かに兒童を観察し、善き傾向の遺傳は之を引き延ばして其の天賦を全うせしめ、惡しき傾向のものは之を發達せしめざるやう深く注意し、以て教育の可能を十分發揮せざるべからず。佛のグォーは數世代を追ひて遺傳を改善し行くに依りて、人類の完全なる發達を見るべしと唱へたり。

四、教科をして相互に聯絡關係せしむる必要を説き、且つ其の方法を詳述せよ。

(擬答) 各教科をば相互に聯絡關係せしむべき理由は、思ふに左の點に歸すと云はざるべからず、抑も宇宙人生は、一の有機的關係を有せる統一體にして、之を明かに説明し理解せんがために、畢竟各教科を假りに、相分つに過ぎず。されば各教科を聯絡關係せしむるは、此れ即ち宇宙人生を能く一纏に説明し理解し得らるゝ如くなす所以なり。而てまた此の種々の教科を教ふるところの兒童の心は、一つなるべきが故に、各教科を巧みに聯絡關係せしむるに、あらずんば、此の宇宙人生は、決して能く兒童の心に理解せられべきにあらず。今茲に此の教科を聯絡關係せしむるとによりて、收めうべき効果を列挙すれば、第一には時間を省くことを得、第二には一方にて深く了解せざりしことを他方に於て能く深く了解せしむることを得、第三には其の了解を深くするとより、應用を敏活ならしめ、更に進んでは其の感情意志をも練りうべく、人格全體を陶冶することを得べし。各教科を聯絡關係せしめざるべからざる必要は、蓋し此の點に存す。

此れが統一の方法としては、各教科の性質相似たるものは密接に之を關係せし

め、其の密接に關係ある教科はなるべく一人の教師にて擔當する如くし、又各教科を長き學年の間十分なる前後の關係を有せしめて教授する如くし、又校長は各學科統一の中心となるやうなさざるべからず、要するに學科の數は多くとも、畢竟は此の有機的關係をなせる宇宙人生を説明し理解せしめ、且つ其等多くの教科によりて一人格を練り上ぐと云ふ主旨を貫徹する如く計らざるべからず。尙ほまた教科統一には各教科の教科書の間、に於ても必ず統一なかるべからず。

五、童話の教育上に於ける價值を論ぜよ。

(擬答) 童話の教育上に於ける價值を最もよく認めたる者はヘルバルト派なり、ヘルバルト派は小學校の初學年の如きは童話を中心として歴史のみならず宗教も國語も唱歌も算術も教ふべきことを要求せり。然るに之れに反對する者は、童話を教ふるは兒童に架空なる事柄を知らしめ、其の妄想を興さしめ、ために後に事柄の眞理を理解せしむる場合に少からず妨害をなすべしとし、之を教育上より排斥せんとす。此れ共に兩極端を云ふものにて、眞理は其の中間に存せざるべからず。

思ふに小學の初學年の間は、兒童の心理の發達は頗る想像的にして、自ら童話に

ある如き心的生活をなせるの時期なれば、此の心の自然の發達に合せて童話を用ゐる時は最もよく此の時期の兒童の心を刺激し深く興味を起さしめ且つ理解を速かならしむべし。此の故に、童話をば教育上有害なりと認めて排斥すべきの理あらず、かゝる意見は此れ兒童の心の自然の發達を顧みざるものにして成人の心を以て兒童の心を律せんとするもの、其の誤謬や甚だしと云ふべし。但し童話を課する年齢は小學の初め一二年遅くとも三年位に限るべく、又其の童話はあまりに荒唐無稽にて現今の進める知識より見て妄想を起さしめ迷信を獎勵すと見ゆる如きものは力めて之を避け唯其の詩的の想像力を鼓舞し、依りて以て各種の有益なる知識を得しむるものに限るべし。

六 維新以後小學校の編制及教科の沿革を述べて、之に關する現今法令の概略を記せ。

(擬答) 維新以後に於ける小學校編制の變遷は甚だ複雑なるものなるが、其の大略を記せば左の如し。

明治二年 小學校の設立。之を各縣府に令す。

同 五年 學制の發布。約六百人を一の小學區と定め、各區小學校を設く、就學兒童は六歳以上のもの。小學校の種類は尋常小學、女兒小學、村落小學、貧民小學、小學私塾、幼稚小學(貧民小學と幼稚小學とは設立に至らずして止みたり)。尋常小學は下等、上等の二に分ち修業年限八ヶ年。

同 十二年 教育令の發布。公立小學校を設置す。修業年限八ヶ年、土地の情況により四ヶ年に減ずることを得。

同 十三年 改正小學校令の發布。學區の制を復す。

小學校教則總領を頒布す、小學を分ちて初等、中等、高等の三となし、初等中等は各三ヶ年、高等は二ヶ年なり。

同 十九年 小學校令の發布。從來の制度を一變す。小學を高等、尋常の二に分ち、年限各四ヶ年、土地により温習科を設く。學齡六才より十四才に至る八ヶ年尋常科の課程を終らしむるは父兄後見人の義務なりとす。土地により尋常の代りに簡易科を置く。是れ森有禮氏が文部大臣たりし時に制定せられしもの、實に現今小學校令の基礎たるなり。

同二十三年 小學校令の改正。此れ三十三年三月まで行はれしもの。
同三十三年新小學校令の發布。此れ現今尙ほ行はれつゝあるもの、小學校を分ちて尋常小學、高等小學、及尋常高等小學の三となし、其の性質より云へば多級小學と單級小學とあり。尙ほ又國家が保護者に對し、四年間兒童に就學せしむべき義務を負はしむるも以前に同じ。補習科を置くことあり、尋常のは義務教育の不足を補ひ、社會的生活の準備をなすもの、高等のは同じく社會的生活の準備をなすといへども、主としては實業上の知識を與ふるにあり。

次に教科目の變遷を舉ぐれば左の如し。

明治五年の學制 下等科は綴字、習字、單語の讀方、暗誦、書取、會話の讀方、暗誦、書取、洋法算術、讀本の讀方、論講、文法、地理の讀方、論講、修身、口授、養生、口授、究理、學、論講、各科溫習。上等科は讀本、論講、究理、學、論講、書、讀、細字、習字、書、讀、作文、史、學、論講、細字、速寫、算術、幾何、博物、化學、生理。

同六年の改正 下等科は綴字、習字、單語、讀方、國體、學、口授、修身、單語の暗誦、書取、會話の讀方、書取、讀本の讀方、論講、養生、口授、文法、地理、論講、物理、學、論講、書、讀。上等科は

算術、文法、地理、論講、書、讀、細字、習字、書、讀、作文、史、學、論講、細字、速寫、算術、幾何、博物、化學、生理。

同十二年の小學校令 讀書、習字、算術、地理、歴史、修身、算術、體操、物理、生理、博物、裁縫。
同十三年の改正小學校令 初等科は修身、讀書、習字、算術、唱歌、體操。中等科は之に地理、歴史、圖畫、物理、博物、裁縫を加ふ。高等科は生理、化學、幾何、經濟、家事を加へ裁縫を除く。

同十九年の小學校令 簡易科は讀書、作文、算術、習字。尋常科は修身、讀書、作文、習字、算術、體操、圖畫、唱歌、裁縫、英語、農業、手工、商業。

同二十三年の改正小學校令 尋常科は修身、讀書、作文、習字、算術、體操、唱歌、日本地理、日本歴史、圖畫、手工、裁縫。高等科は修身、讀書、作文、習字、算術、體操、唱歌、日本歴史、外國地理、日本地理、理科、圖畫、幾何、初歩、外國語、農業、商業、手工。

同三十三年の新小學校令 尋常科は修身、國語、算術、體操、圖畫、唱歌、手工、裁縫。高等科は修身、國語、算術、日本歴史、地理、理科、圖畫、唱歌、裁縫、手工、農業、商業、英語。

注意 ×印を附したるは土地の情況により加除しうべき學科なり。

七 高等小學第二學年の兒童に、左の歌を教授する教授案を作れ。

海國男子

わが住む日本帝國の 四面は海に圍まれて、いづくに行くにも、棹楫を借
らて進まん道あらず。この海國に生れたる 日本男子は、國のため、波路を
おのが家として、住まん覺悟を定むべし。山なす、沖の大波も、恐れず、進む
勇氣こそ、幼き時の練習に。よりて、えらるゝ身の寶。泳の業も怠るな。ほ
ゝとの遊もこゝろみよ。日本は海の國なるぞ。海はわれ等の家なるぞ。」

〔擬答〕 此の歌を教授するには豫備、提示、應用の三段に分つ。

第一段豫備 豫備に於ては、先づ此の時間に「海國男子」と云ふ勇ましき歌を教授す
と云ふ目的を示し、生徒に向ひ、地理にて得たる觀念を呼び起さしむるため、吾が帝
國の四面海に圍まれ居る状態を問答によりて喚起す。且つ、日本帝國の地圖をか
ゝけて海國の觀念を一層明瞭ならしむ。圍まれ、棹楫、覺悟、練習、寶の如き難字難句
は之を黑板に書き示して教ふ。然る後に第二段に移る

第二段提示 此の歌は四段に切れ居るを以て四段に分ち、先づ第一段を一人の生
徒に讀ましめ、其の誤れるところは之を正し、第二段、第三段、第四段と各生徒を指命
して讀ましめ、其の誤れるは正し、全體を讀ましめ、終りたる後、更に全體を通じて教
師範讀をなし、一生徒に之を繰返さしむべし。

讀方終りたらば、教師に於て、さきの四段の順序を追ひ、一段毎に之を平易に解釋
し、各段の終り毎に生徒にも繰返さしめ、全體を解釋し終りたる上にて更に一生徒
に全體を通じて其の大意を語らしむべし。

かくて不審を聞き、其の質問終りたる上、教師は一生徒に此の意味を理解しつゝ、
審美的讀方をなさしむべし。審美的讀方とは、抑揚頓挫により、其文章が表はす感情
を讀み表はすを主とするものなり。茲に於て本を閉ぢしむ。

第三段應用 應用に於ては、棹楫、覺悟、勇氣、練習、身の寶、泳の業などの字に就きてか
はるゝ、生徒を呼び出し、之を黑板に書かしめ、其の誤れる點を正すべし。次ぎに
は、棹楫を借らて、泳の業も怠るな、天、爾遠波の意味を問ひ、之に似たる
文を綴らしめて、其の理解を正確にす。かくて、最後には、此の歌を讀みて如何なる

感を起したるかを問ひ、海國男子として海をば吾が家となすの志を起さしむべし。

國語及漢文科 (明治三十八年二月十八日施行本試験)

種村宗八述

解釋

一、咲く花の匂ふが如くと言ひけむ奈良の御時しらぬひの筑紫の大みこともちの館に下つ司人らをつとへて梅のうたげし給へりしを古きためしにて世々この花をなんめてあへりける大凡草木の花の天地のなしのまにく咲き出づるにくさくの色ありといへど白妙なると紅なるとにまされるしもあらざりけりそが中にもけぢめありて百入千入に色こきはこちたくうたてありてかしこきは衣の色めにさへかよへばにや戯れにく、あら染のあさらかなるは下が下の短き袖おぼえて品おくるゝかたになんちもはるゝたゞ梅のゆるし色なるがものづから花びらごと光こもりてその色さへこよなきにしくものやはあるべき(うけらが花)

〔擬答〕 大意 古より梅の花を愛づることなるがこれ實に然るべきことなりと

て其の賞むべき故を述べたるなり。

○咲く花の匂ふが如く。萬葉集卷三に太宰少貳小野老朝臣歌一首と題してあをによし寧樂の京師は咲く花の匂ふが如く今盛りなりと詠めるがあり。これを指していへるなり。さて匂ふは色の映えて麗はしきをいふ。○奈良の御時。奈良に都せられし御時にてこゝにては聖武天皇の御代をいふ。○いらぬひの。筑紫へかゝる枕詞なり。○大みこともち。太宰府の古稱なり。大御言持の義。○梅のうたげ。觀梅の宴。○天地のなしのまに。なしは生しの義なり。天地の生ずるまゝにの意。○けぢめ。區別。○百入千入。モ、シホチシホと讀む。幾度も藍汁の中へ入れて色濃く染むるをいふ。○こちたく。言痛の義より轉じてことごとくしく仰山なるをいふ。○うたて。轉々甚しくなりゆく義より轉じて尋常ならず善からぬをいふ。○かしこききは。畏き際なり。恐れ多く勿體なき身分といふこと。○あら染の。淺にかゝる枕詞なり。萬葉集に桃花楊淺等乃衣ウレナカフソフソコヨロアキカミまた紅薄染衣淺爾ベニウソクシロシロなど書けり。あら染は桃色薄き紅の色なり。○品おくるい。品格の劣ること。○ゆるし色。許し色と書く。衣服の染色の深紅深紫なるは禁

色として着ることを禁ぜられしなり。之に對して薄紅薄紫等は禁制なくして常人も着ることを許されたればゆるし色といふ。

通釋 奈良の都は咲く花の匂ふが如く今盛りなりといふ古歌があるが此の奈良の都の御代に筑紫太宰府の館に配下の官吏どもを集めて觀梅の宴を催された事がある。これが觀梅の古い例であらうが其の後何時の世にも此の梅の花をば別して賞翫したものぢや。大凡草木の花が天地に生育られて咲き出るのに種々の色があるけれども白と紅とに勝れるものは古より無い。其の中にも自ら亦區別があつて濃紅なのはことごとくしくして善くない。加之深紅の色は勿體なき御身分の方の御着しになる着物の色と同じである故に戯れにくいので賞翫するに適當せない。薄桃色なのは下賤の者の短い袖の色らしくして品位が劣るやうに思はれる。たゞ梅の色は許し色に叶つてゐるのみならず花瓣に光が有つて其の上に無上の佳き香がある。此の梅に肩を並べる程の佳き花が外に有らうか。

二 きりくすのつゞりさせとは人のために夜寒を教へ藻に住む蟲はわれからと只身の上をなげくらゐを衰蟲の父よと呼ぶは守宮の妻をおもふには似ずされ

ど父のみ戀ひてなどかは母を慕はざるらん(鴉衣)

〔擬答〕 大意 蟲の鳴き聲、蟲の名又は蟲の性質につきて連想したる所を叙したるなり。別に一貫せる主旨なし。

〔語釋〕 ○さりくすのついでりさせとは。ついでりさせはさりくすの鳴き聲なり。古今集に「秋風に縋びぬらし藤袴綴り刺せてふきりくす鳴く」といふ歌あり。綴り刺せは着物を綴り刺して防寒の用意せよといふ意。さりくすの鳴き聲に連想して爾か云ふなり。○藻に住む蟲はわれからと。われからは蟲の名なり。藻に住む小さき蟲にて藻の濕へるときは見えねども藻の乾くときは能く見ゆるやうになり且つ乾くに從つて其の殻の破るゝものなれば破殻の義を以て名くといふ。古今集に「蟹の刈る藻に住む蟲のわれからと音を社鳴かめ世をば恨みじ」といふ歌あり。破殻と云ふ名と我れからとを連想したるなり。○なげくらんを。嫉くらん然るをの意。○蓑蟲の父よと呼ぶは。ちよは蓑蟲の鳴き聲なり。其の聲を父よに連想したるなり。枕草子に「蓑蟲いとあはれなり。鬼の生みければ親に似て、これも恐しき心ちぞあらんとて、親の恐しき衣ひき着せて、今秋風吹かんとて、これにぞ來んずる。待てよといひて逃げ去にけるも知らず、風の音聞き知りて八月ばかりになれば、ちよよ」とはかなげに鳴く、いみじくあはれなり」とあり。○守宮の妻をおもふ。守宮は殊に妻を愛する蟲なりと古人の考へしなるべし。今も此の蟲の交尾したるを捕へて黒焼となして人に振りかくる時は、ほれぐすりになるといふ俗諺あり。此の俗諺に連想せしものなるべし。

〔通釋〕 さりくすがついでりさせ」と鳴くのは着物を綴り刺せといふことで夜寒の來ることを人に教へるのであらう。藻に住む蟲に「われから」といふ名の附いてあるのが此の蟲は、我れから其の身の上を歎く故に此の名があるのである。之とはちがうて蓑蟲は「ちよよ」と鳴くが、これは其の父を想ふ孝心から出るので、守宮が只々妻を想うてのみゐるのとは雲泥の差である。さりながら、父一人を戀ひ慕うて、何故に母をば慕はないのであらうか合點が行かない。

設問

三、左ノ事項ニツイテ知レル所ヲ記セ。

〔擬答〕古今傳授。爭亂相繼ぎて文學全く衰へし室町幕府の頃に及び古今傳授といふこと歌道の師範家より出てたり。師範家は之を以て歌學の奧儀秘事となし、荒唐不稽の言を用ひて其の來歴を神聖なるものと爲し、以て愚俗を嚇さんと試みきと雖も、其の言ふところ毫も歌學上に益あるにはあらず。たとへば古今集中の喚子鳥いなちほせ鳥百千鳥を三鳥と稱へて、極めて大切なる秘事となせるが如き其の一例なり。抑々上古の歌は、人々の感じたるまゝに、當時の言語を用ひて隨時に詠みしものなれば、固より歌學といふものなかりき、萬葉時代これ也。後世言文二途に分れ、且つ題詠の盛に行はるゝに至りては、師授を受くるにあらざれば、歌を詠むこと容易ならずなりぬ。是に於てか歌學といふものゝ出づるは、蓋し自然の勢なり。殊に俊成定家爲家の三大歌人が相繼ぎて一門に出てしより、歌を詠まんとするものは、之に就きて教を請ひ、其の家をして歌學上の一大門閥たらしめき。其の子孫亦相繼ぎて歌道を教へしより、終に師範家と稱せらるゝに至りぬ。斯くて師範家は嚴重なる和歌の諸式を説きて、詠歌者を束縛せしが、南北朝以後、文學全

く地に落つるに及びては、其の所謂歌學も益々劣等に赴き、終には古今傳授など、稱して歌學上全然無用なる事をも秘傳奧儀となして尊重するに至りしなり。

川柳。川柳は俳句の一體なり。俗語を用ひて滑稽を弄び、或は諷刺の意を偶したるものにして、主に下流社會に行はる。巧に人生の弱點を捕へ、來りて翻弄する所、其の着想實に人の意表に出て、讀む者をして抱腹絶倒せしむるの妙あり。而かも着想文辭甚だ野卑にして、文雅の士の口に上せ難きを多しとす。其の一二を擧ぐれば、居ゆ三杯目にはそと出し、頬と尻口と額は下女出過ぎの如きこれなり。川柳は寶曆明和の頃、江戸淺草の柄井川柳といふものゝ、鼓吹によりて、大に行はるゝに至りしより、此の名を負へるなりといふ。

漢和連句。漢和連句は漢詩に和歌を連ねて唱和する一種の遊戲文字なり。其の法、甲先づ漢詩の一句を出だすときは、乙は和歌の七音句二つを連ねて之に和し、上下の詞に因縁關係を保たしむるやうに作りなすなり。故に漢詩の素養あり、且つ連歌の趣味を解する者にあらざれば、之にたづさはること能ざる至難の遊戲たり。されば室町幕府の末に、五山の僧徒と連歌師との間に僅に行はれしのみにて、

其の後も盛に行はれし事無しといふ。「枕草紙」を見るに、頭中将ある時、蘭省の花時錦帳の下と書きたる紙片を清少納言に贈りて即答を求めしに、少納言が「草の庵を誰か尋ねん」と書きつけて返し、ことを記したり。これ「白氏文集」なる「蘭省花時錦帳下、廬山夜雨草庵中」とある對句の上半を示して下半を少納言に詰り問ひしものなり。少納言はよく之を知れども、漢字にて答へんも面白からずと思ひて、下句の意に因める七音二句を以て答へしなり。思ふに後世の漢和連句は其の淵源遠く茲に發せしならんか。只後世の連句の上半が五言句なるを異なりとするのみ。「感時秋苑庭」の上句を「かつ咲き初むる花の萩が枝を以て受けたるが如き即ち是れなり」。(委しきは佐々政一氏の連俳小史を見よ)

四 維新以後ノ文學ヲ概説セヨ。

〔擬答〕 王政維新の大業成るや、攘夷主義は忽然として開國主義と化し、尋て西洋崇拜となり、西洋文明の輸入となりたれば、制度慣習嗜好、一として舊態を保てるもの無く、社會の事物日に新にして、其の送迎に遑なきの狀あり。試に之を文學上に見るも、變化百出して日に其の面目を改めたること、敢て他の事物に譲らず。茲に維

新以後に於ける文學上の顯著なる事項を略説すれば大略左の如し。

維新の大業成りて國是の開國主義となるや、西洋の事物を知らんと欲するの念は、油然而して國民の間に起りき。是に於てか洋學の研究漸く行はれ、洋學者の筆によりて西洋事物の邦人に紹介せられたるもの尠しとなさず。故福澤諭吉翁が慶應年間より、其の家塾に於て英語の教授に従事し、開國の氣運に乗じて幾多の俊材を其の門下に出だしたるは、教育史上文學史上に永く特筆すべき事なるが、其の著譯によりて一世を益せし功績も亦極めて顯著なるものあり。其の著「世界國盡」(弱理問答)「西洋事情」等は、最も廣く行はれし者の一にして、故内田正雄氏の「輿地誌略」故中村敬宇氏の「西國立志編」等と與に、西洋の文明を邦人に傳へて、人文の進歩を助けしこと幾許なるを知らず。是れ實に明治十年前後までの事なりとす。

此の頃より洋學の氣運漸く旺盛となり、青年有爲の徒の之を修めざる者なく、社會また競うて其の著譯を歡迎せしかば、終には西洋の美文をも翻譯して之を公にする者あるに至りたり。矢野龍溪氏の「經國美談」の如きは蓋し其の先驅にして、又最も廣く行はれし者の一なるべし。爾後、他の著譯と與に、美文の翻譯、また絶ゆるこ

と無くして以て今日に至りぬ。

東洋に在りては古來小説家を蔑視し之を目するに戯作者を以てし作者亦概して陋劣の徒にして自らも其の侮蔑に甘んじたりしを以て地位名望ある文士にして筆を小説に染めしものは絶えて無かりき。小説の位置依然として斯くの如くならんには讀者の嗜好を高め其の氣品を養ふが如き高雅なる傑作の出でんことは争てか之を望むを得ん。然るに坪内逍遙氏帝國大學文學部を出て小説神髓を著して世人の小説に對する謬見を打破して其の抱負の一斑を示し又自らも書生氣質「妹と脊鏡」等を出して其の抱負を實にするに及び慥に小説界に一新紀元を畫したり。氏は純乎たる學者にして温乎たる紳士なるが上に其の輿望また輕からざりしかば世人始めて小説の位置を解するに至りぬ。是れ明治文學を説くものゝ忘るべからざる一大要點なりとす。是れより後社會に地位あり名望ある學者にして筆を小説に染むるもの漸く多きを加へ以て今日の盛況を呈するに至りぬ。是れ時勢の然らしめたるものなりとはいへ氏が率先して模範を垂れたるの功亦大なりと謂はざるべからず。脚本家の地位はた小説家のそれの如く社會より輕

視せられ俳優の附屬物視せられしが逍遙氏が文壇の重鎮たるに及び其の氣運茲に一轉して紳士學士の筆を之に染むるもの漸く多く今や競うて新作を出だし劇場また競うて新作を演ずるに至りたるを以て其の著大の進歩をなすも蓋し遠きにあらざるべし。

韻文界の情況を通觀するに短歌俳句は漢詩と與に新聞雜誌の一部に其の地位を占めたりと雖も概して舊様を守れるの概ありて未だ大に觀るべき者の出でたるを聞かず。長歌は一轉して所謂新體詩となり其の詩形も長短もともに種々の變化を爲しつゝあり。故外山正一氏故矢田部良吉氏等の新體詩を慕めたる「新體詩抄」の出でしは明治二十年頃の事と覺ゆ。其の後も幾多の新作出でしも未だ嶄然として頭角を顯せるものを見ず。今新體詩を以て之を前代の長歌に比すれば多少の進歩なきにあらざると雖も之を脚本小説等の進歩に比する時は與に日を同うして語るべからざるものあり。是れ國語の性質の之に適せざるが爲か抑々作者の手腕の未熟なるがためか。

翻つて文體の變化を見るに明治の初年文筆に従事せし者は多くは漢學者なりし

を以て其の文體も自ら漢文直譯の臭味を帯びたり。後洋學の旺盛なるに及びて歐文直譯體と稱せらるゝもの出づ。此の直譯體の文は、多くは國語の慣用法に背き、往々にして其の意義の推測し難きものすらあり。是に於てか國語の法則の妄に破り難きこと、漸く學者の間に認められ、古文の研究、一時に勃興し、中學校師範學校等において、國語其の實は古文なりを以て、必修學科の一となすに至りぬ。之より直譯體の甚しきもの、漸く減じて、古文の法則を守らんとする者、漸次増加するに至りたれども、古代の文法を以て今日の文を律せんことは、到底一般に行はるべきにあらず。且つや社會の事物、日に複雑を加ふるに至りては、文章の如きも、平易通俗ならんことを期すべきは、理の當に然るべき所なり。是に於て、言文一致體と稱せらるゝ文體、一時に勃興し、以て今日に至りぬ。言文一致の文體は、其の研究、日尙淺きを以て、未だ圓熟の境に達せず、従つて文章としての價值に富めるもの甚だ尠しと雖も、今後の著作界に大勢力を占むべきものは、思ふに此の文體に外ならざるべし。

尙、明治文學を説く者の必ず忘るまじきは、教育制度の日に完備して文運發達の

原動力となりしこと、活版印刷の方法日に進歩して圖書の刊行をして容易ならしめしこと、新聞雜誌の刊行日に盛大に赴き、間接に直接に文學の發達を助けしこと等、是れなり。

作文

五、旅順ノ陥落ヲ賀スル表 (普通文)

右通シテ四時間

〔注意〕 答案ハ毛筆ニテ一問題毎ニ別紙ニ認ムベシ姓名ハ一枚毎ニ認ムベシ
〔擬答〕 略す

接近聯合或は接近聯想

獨 Berührungssociation.

英 Association by contiguity.

佛 Association par contiguïté.

觀念聯合の一種にして、其法則は「同時に若くば近く
相繼續して起りし表象若くば其他の聯合的意識内
容は相互に想起せしむる傾向を有す」といふにあり。

(朝永文學士の「哲學辭典」より)

國語及漢文科

(明治三十八年二月廿日施行本試験)

女子師範學校、師範學校女子部、高等女學校教員志願者の分、

文學士 久保得二述

解釋及讀方

本紙に句讀・反り點・送り假名を附し、別紙に解釋すべし但第二問の解釋は傍線
を施したる語句のみに止むべし)

一、(イ) 君子矜而不爭、羣而不黨 (論語)

(ロ) (イ) 大人者言不必信、行不必果、惟義所在 (孟子)

〔擬答〕 (イ) 君子矜而不爭、羣而不黨 (論語)

字釋—矜は普通にはこゝると訓する字で、矜莊の意である。朱註には、莊以持己曰矜
とあつて、つまり、其行の道徳に協へるを自負する氣味で、人の知る處へ持ち出し、我
こそは君子と言ひたい様な安排をいふのである。爭は、能を人に争ふの心。羣は、
身を以て、親疎尊卑貴賤種々様々の人の間に立ち交り、與に居るの稱で、説文には羣
といひ、玉篇には朋といひ、詩の小雅には或群或友といひ、荀子には君群とある。さ

れば群には和聚といふ意味もあるので、朱註には、和以處衆曰群と明言してある。

黨は、相朋して非を匿すので、つまり、朋黨比周の意である。

文義——君子たるものは、時に或はその道徳を自負する氣味で、我こそ君子で御坐いといふ様な顔をして、超然高踏、世の汚穢を蔑視して打澄しては居るが、その本意は己を潔くするに在るので、決して人の知ることを求めるのではない。されば、少しも野心もなく、邪念もなく、従つて能を人に争ふ必要もない。又君子は、物我を一視して、多數の人の間に打交り、圓滑に立ち廻はるけれども、是非善惡を辨ずるの一點に於ては、親疎尊卑の別に拘はらず、至つて公平であるから、或る關係の爲に、善を惡となし、非を理となすなどの事は無い。試に之を小人に見るに、彼はあくまで利己的であるから、常に争を絶えず、又勢利を主となすが故に、時に朋黨比周の事をもなすのである。かくの如く、君子小人の相去ることは、管に霄壤のみならず、而して、其本は心の据え方一つで、瑣細毫釐の處より生ずるものである。慎むべきは、平生の修練で、之を以て、君子小人を判別するに、決して謬ることは無い。

(ロ) 大人者、言不必信、行不必果、惟義所在。(孟子)

字釋——言不必信は、言必ずしも信ならずと讀んでも善いが、こゝに掲げた様に、必の字を動詞に見る方が、分かり易い。必は、こゝでは、期するといふ義。信は、信實、即ち他を欺かざるの意。果は、決勇を以て、決行するといふ義。

文義——これは、義の重要な事を論じたので、人間の行爲に就いては、種々の名目もあるが、その根本たるものは、唯だ義で、その外の物は、皆この義から出たものである。言には、信實を貫び、行には、果決を貫ぶこと、今更言ふまでもないが、その本は、矢張義であるから、こゝに、本末の別を明かにし、信果よりも先に、義を重んじなければならぬ。されば、大人たるものは、その言を以て信に背かない様にしやうとは思はず、又その行を以て果に背かない様にしやうとは思はない、但だ義の在るところに従つて、言行を爲すのである。凡そ義の在るところ、時に或はその言信ならず、その行果ならざることもあるが、しかし、それは、跡に就いて論じたもので、心に就いて論じたものではない。されば、たとひ、其表面に於ては、信ならず、果ならずと雖も、苟くも義の在るところに従つたものであらば、それは、矢張信の極、果の極たるに相違ない。すべての事は、義を中心とし、事に随つては、理に順ひ、時に因つては、宜きを制するの

て義の在るところには、變通がある。それでこそ、天下の事が流動自在であるので、徒に信果に拘泥するのは、小人の事である。論語に「君子之於天下也、無適也、無莫也、義之與比」といひ、又「言必信、行必果、硜々然小人哉」とあるが、この章と全く同意で、兩々相對して、愈よ其眞義を窺ひ知るべきである。

二、古之人其才中略吾告子止於此矣（唐宋八大家文）

〔擬答〕 古之人其才非有以大過今之人也。其平居所以自養而不敢輕用以待其成者、閔閔焉如嬰兒之望長也。弱者養之以至於剛、虛者養之以至於充、三十而後仕、五十而後爵、信於久屈之中、而用於至足之後、流於既溢之餘、而發於持滿之末、此古之人所以大過人、而今之君子所以不及也。吾少也有志於學、不幸而蚤得與吾子同年、吾子之得亦不可謂不蚤也。吾今雖欲自以爲不足、而衆且妄推之矣。嗚呼、吾子其去此而務學也哉。博觀而約取、厚積而薄發、吾告子止於此矣。（唐宋八大家文）

（一）「持滿」の滿は、弓を十分に挽きしぼること。持は、其儘に支へ持つこと。故に、持滿とは、弓を十分に挽きし儘、その發するを待つが如く、力を盡して準備せし状態を

540

（二）「同年」は同年進士の略、同じ年に進士の試験に及第した者といふこと。

（三）博觀而約取、厚積而薄發、博く古今を觀て、一として究めざるなく、しかも巧にその要領を摘み、決して散漫に失せず。又厚く蘊蓄を積み、少しづつ之を發出して、遂に窘困することなきをいふ。博觀而約取は、孟子の博學約之以文といへると同意にして、専ら學藝研鑽の方法に就いて言ひ、厚積而薄發は、専ら議論をなし、自己を顯彰する事に關する注意をいふ。

三、東坡赤壁圖 市河寬齋

孤舟月上水雲長、崖樹秋寒古戰場、一自風流颯坡老、功名不復畫周郎

〔注意〕 解釋及讀方を通じて四時間とす

〔擬答〕 東坡赤壁圖 市河寬齋

孤舟月上水雲長、崖樹秋寒古戰場、一自風流颯坡老、功名不復畫周郎

〔題意〕 東坡は蘇軾。その黃州に在りしとき、赤壁に遊び、前後二回賦を作つた。これは、その赤壁舟遊の圖に題した詩である。

〔字釋〕 孤舟、外には舟もなく、唯だ一つ浮びし舟 ● 水雲、水上に柵引く雲 ● 崖樹、赤壁

の崖の上に叢生する樹木●古戰場赤壁は、三國の初魏吳二國の軍の戦ひし地である●風流は、下の功名に對して云ふ●坡老は、東坡老の略即ち蘇軾●周郎は、吳の周瑜。魏の曹操、八十萬の衆を以て吳を攻めしとき、火攻を以て、其舟を焚き、遂に其國を安んじた。

(詩意) これは、赤壁の圖とかや。成程、見れば、一葉の舟、江上に浮び、秋の夜の月、高くなり、水上には、雲、長く、棚引き、名も、赤壁の崖の上には、樹木叢生、霜露を浴びて、秋は愈よ寒く、古戰場と聞くからに、物とはなしに、淋しげなる景色、善くも、書きしものかな。これに付けて思ふは、東坡先生の偉らいことにて、赤壁の地、この老、一たび風流の遊をなせしより、千歳の下、その流風餘韻を慕ふもの、愈よ多く、赤壁といへば東坡の舟遊といふ様に成つて仕舞ひ、その昔吳の周瑜が魏軍を破りし千古の功名に就いては、かつて之を書くものもない。あゝ、誰か、功名を貴しといふか、風流ひとり千古たること、之を以て、見るべく、而して、東坡先生、愈よ欽慕すべきものである。

國語及漢文科

(明治三十八年二月廿日施行本試験)

中學校師範學校高等學校教員志願者ノ分

文學士 久保得一述

解釋及讀方

本紙ニ句讀・反リ點・送り假名ヲ附シ別紙ニ解釋スベシ(但第二問ノ解釋ハ傍線ヲ施シタル語句ノヨニ止ムベシ)

一、伐虢之役師出於虞(中答)三月虞乃亡(國語)

(擬答) 伐虢之役、師出於虞宮之奇諫而不聽、出謂其子曰、虢將亡矣、唯忠信者能留外寇、而不害除、聞以應外謂之忠、定身以行事謂之信、今君施其所惡於人、聞不除矣、以賄滅親、身不定矣、夫國非忠不立、非信不固、既不忠信而留外寇、寇知其愛而歸圖焉、己自拔其本矣、何以能久、吾不去懼及焉、以其孥適西山、三月虞乃亡(國語)

字解—伐虢之役は、晋の獻公、虢を征せし役をいふ●師は晋の兵士●宮之奇は虞の大夫、さきに虞公を諫めて、晋に道を假すこと勿れといつたが、聽かれなかつた●外寇は外國の兵、こゝにては晋の軍を指す●聞は聞恐の心●賄は財物、虞公が晋より

屈産の乘垂棘の壁を受けて道を假せし事をいふ●親、虞と虢とは元と同姓の國にして、虞は大王の後、虢は王季の後といふこと●以は率ゐてと讀む●其孥の孥は妻子家族●適は往く●西山は國の西界に在る山。

文義——晋の獻公が兵を出して、虢を伐つたときに、その兵は道を假りて、虞の國から出て行つた。この時、虞の大夫の宮之奇といふものが、虞公を諫めて、道を假すの不可を論じたけれども、聽かれなかつた。そこで、宮之奇は、虞公の宮より出て、家に歸り、其子に謂つて曰く、悲しいかな、我が虞の國は、亡びるに違いない。唯だ忠信の道を守るものばかりが、外國の兵士を其國に留めて宿をして遣つても、害は無いのであるが、苟くも忠信を缺くものに於ては、甚だ危いことである。その忠信とは、何であるかといふに、己の闇い心を除いて、外に應じて同情を寄せるのが忠であつて、己の身を安んじ定めて、正しい事を行ふのが信である。然るに、虞公の行を觀るに、忠信兩つながら缺けて居るから仕方がない。今、虞君は、誰れでも惡むところの亡國の禍を虢に施し、その爲に道を假すといふのは、闇味の心の除かないものであるし、馬だの壁だの、少しばかりの財寶に目を呉れて、同姓の親を滅ぼすを願みざるは、

其身の定まらざる仕草である。夫れ、國家は忠に非ざれば立ち行かず、信に非ざれば固からず、忠信を以て、必要缺くべからざるものとして居る。然るに、すでに忠信ならずして、外國の兵士を國中に留めたらば、その外國の兵士は、國の隙間を知つて、歸り道に、きつと之を取らむことを謀るであらう。自分が既に國家の根本たる忠信を抜き去つて仕舞つたからには、その國は、如何にして、久しく持ち耐らへやう、とても、六つかしい。もし吾にして早く此地を去らなければ、禍に及ぶを懼れる外はない。宮之奇は、此の如く語りし後、其妻子を引き連れて、官を棄て、家を棄て、國の西境の山に隠れたが、その先見、果して違はず、三個月たつて、晋の師、虢を亡ぼして歸るときに兵を加へ、虞の國は、そこで滅亡して仕舞つた。

二、敬啓者竊聞滿洲之地中曷謹此禱求諸維德鑒

〔擬答〕敬啓者、竊聞滿洲之地、沍寒異常、願我百萬出征貔貅、攻取戰勝、義軍所向、勁敵披靡、惟節屆隆冬、之後、滿天霜雪、朔風侵骨、我軍務當道、早已講求禦寒方法、雖固無墮指、裂膚之慘、然其勞其苦、幾乎非設想所能及、因此業由、東京國民援護會、提商勸募、新舊毛布、遞交軍務當道、轉寄出征士卒、現聞日本官民、爭先捐輸、已上數十萬張之多、旅居本埠中

國紳商諸君、感深唇齒、誼重輔車、見善勇爲、夙有所聞、伏冀將新舊、毛布無論多寡、送捐本報館或神戸新報館、即當代呈交、大阪第四師團、姫路第十師團、武蔵以供該兩師團出征兵士之用、尙祈所捐毛布一端、別附白布註明捐者姓名、爲荷、謹此禱求、諸維德鑒。

(一) 提商は發議發起。

(二) 遞交軍務當道、遞交は遞轉して交付すること。軍務當道は軍務當路者、こゝにては恤兵部事務官。故に恤兵部事務官に引き渡し、然る後云々といふ義。

(三) 感深唇齒、誼重輔車、見善勇爲、夙有所聞、唇齒は離るべからざる關係をいふ、唇缺けて齒寒しといふ喩の如し。輔車の輔は外に在る小車輪、車は内に在る大車輪、大小の車輪、その一廻はれば、他も亦た廻るので、これも前者と同じく、極めて親近なる關係をいふ。そこでこの數句の義は、在留清商諸君は、日清兩國唇齒の如き關係を深く感ぜられ、輔車の如き交誼を甚だ重んぜられ、その上、諸君は善を見れば、之を爲すに勇にして、少しも狐疑踟躕されざることは、從來傳聞致せし所に御坐候故云々といふことに成る。

(四) 謹此禱求、諸維德鑒、德鑒は御同情の念といふ如し。謹んで、こゝに如上の件を諸

君の御同情に訴へて、應分の御寄付あらむことを禱り申し候

三 塞下曲 李白

塞虜乘秋下(中畧)少婦莫長嗟 (唐詩選)

〔擬答〕 塞下曲

李 白

塞虜乘秋下、天兵出漢家、將軍分虎竹、戰士臥龍沙、邊月隨弓影、胡霜拂劍花、玉關殊未入、少婦莫長嗟 (唐詩選)

字釋—塞虜は塞邊の蠻族、匈奴等を云ふ。こゝにては、吐蕃を暗指す。◎天兵は天子の兵、◎漢家は漢の帝室、もと玄宗の事に係れども、之を斥言せずして假托せしなり◎虎竹は兵符。兵符に銅虎符、竹使符あり。兵を發するとき、使者を遣し、各郡に至らしめ、符合ふときは、各地の兵を徵發す。二符を合して虎竹といふ◎龍沙は龍庭の沙漠◎邊月は邊塞の月◎劍花は劍の光彩◎玉關は玉門關。

詩意—塞邊の夷狄どもは、秋高く馬肥えたるの候に乗じてどしどしと南下して來た。そこで之を棄て置く譯にも行かぬ處から、天子の兵は、漢の宮闕より出て、之を防ぐことに成つた。將軍は銅虎符使といふ二符の片々を以て、各州縣の

兵士を徵發し、その兵士は、はるく遠征して龍庭の沙漠、荒寒なる處に露宿して、屯營を結んで居るといふ始末。おもひ見れば邊塞の月は、引きしぼりし弓の形に随つて移り、胡地の霜は、劍の光を拂ふ時に飛び來る。手短に言へば、弓は月の如く、劍は霜の如く、凜烈森肅の景象は、人心をして寒からしむるばかりである。この將士輩、一たび、胡地に赴きし後は、玉門關にも容易に歸つて入ることが出來ない。まして故郷に還るなどいふは、固より豫期すべきことでない。されば、空聞の婦、その夫を憶ふもの、どうして、長嗟しない譯に行かうか、とても出來ない。聖人の政を爲すや、外に曠夫なく、内に怨女なしといふが、今將士をして此の如く少婦をして此の如くならしむるは、果して、誰の愆であらうか。邊を開き、武を黷すは、古しへより、深く戒むるところで、決して、道理のないことではない。

設問

四、初唐盛唐中唐晚唐ノ區別及其各時期ニ於ケル著名ナル詩人ノ姓名ヲ舉ゲヨ
〔擬答〕

初唐は唐の高祖武徳元年より、睿宗太極元年(玄宗開元の前)に至る、凡そ九十五年、その間の詩人は、王勃、楊炯、盧照鄰、駱賓王以上初唐四傑、陳子昂、沈佺期、宋之問、杜審言、劉庭芝、蘇頌、張說、賀知章、張若虛、王翰、李邕、張九齡等

盛唐は、玄宗開元元年より、代宗永泰元年(太暦の前)に至る、凡そ五十二年。その間の詩人は、李白、杜甫、王維、孟浩然、儲光羲、王昌齡、岑參、高適、李頎、崔顥、王之渙、裴迪、賈至、常建等

中唐は、代宗太暦元年より、文宗太和九年に至る、凡そ七十年。その間の詩人は、劉長卿、韋應物、錢起、郎士元、司空曙、耿煒、張繼、李益、韓愈、柳宗元、劉禹錫、白居易、元稹、孟郊、賈島、李賀、盧仝、張籍、王建等

晚唐は、文宗開成元年より、昭宣帝天祐三年に至る、凡そ七十二年。その間の詩人は、李商隱、溫庭筠、段成式、許渾、劉滄、杜牧、張祜、趙嘏、鄭谷、韓偓、杜荀鶴等

五、左の名數を説明せよ

兩儀 三禮 四聲 五常 六朝

〔注意〕解釋、讀方及設問ヲ通シ、四時間トス

〔擬答〕兩儀は陰陽。

三禮は周禮儀禮禮記。

四聲は平上去入。（現代の官語にては、上平・下平・上聲・去聲）

五常は仁義禮智信。

六朝は吳晉宋齊梁陳。

教員檢定試験問題擬答終

附録

國語科參考書案内

文學士 武島又次郎述

文部省の國語漢文檢定試験に應ずるものゝたよりにとて左にいさゝか國語に關して參考となるべき書籍を挙げむ。たゞし國語の試験は解釋と文典と文學史との三者にわかるゝを以て參考書もまたこの三種にわかつていふべし。

一、解釋の參考書

教員檢定試験の目的は中等教育における國語教授に堪ふるの力ありや否やを甄別するにあり。中等教育にありては國語の教材としては古くとも近古時代の文章に止らすが文部省の規定なるを以て教員檢定試験もまた實は近古以後の文章を解釋せしめて、その力ありや否やを檢すれば足るべきなりされど、近古の文章の基くところは中古時代の文章也。中古時代の文章を解釋するを得て始めて眞に近古以後の文章をも解釋すべしとの考にやあらむ、試験の問題は主として中古

平安朝文學の内より撰出せらるゝが如し。されば試験に應ずるものはまづ始めに平安朝文學を理解するの力を養ふことを要す。平安朝の文學これを數へなばその數數百種の多きに上るべしといへども、その中の眼目たるべきものに通曉せば餘は應用の力によりて自由に讀破し得むことつゆ疑ふべきにあらず。然らば眼目たるべきものとは何ぞや。一には源氏物語也。二には枕草子也。三には大鏡也。四には榮花物語也。五には三代集也。さて源氏物語の註釋書にて最宜しきは

北村季吟著 源氏物語湖月抄。大坂圖書出版會社發兌。價二圓八錢
枕草子にては

松平靜著 枕草子詳解。東京誠之堂發兌。價一圓三十五錢

訂正增補 枕草子春曙抄。東京青山堂發兌。價九十錢

大鏡にては

落合直文等著 大鏡詳解。東京明治書院發兌。價一圓六十錢

榮花物語にては

和田英松等著 榮花物語詳解。東京明治書院發兌。價五圓六十五錢

を最よろしとす。以上に加へて奈良時代に於ける万葉集の大體室町時代における増鏡徒然草を知るの必要あり。万葉集にては

加藤千蔭著 万葉集略解。大坂圖書出版會社發兌。價一圓五十錢

増鏡にては

和田英松等著 増鏡詳解。東京明治書院發兌。價一圓七十五錢

徒然草にては

訂正增補徒然草文段。東京青山堂發兌。價八十錢

を最よろしとす

たゞしこれらを通讀する、一朝一夕のわざにあらず幸にして第一高等學校の編纂にかゝる

高等國文。東京吉川弘文館發兌。價一圓二十錢

といふものあり。徒然草増鏡大鏡枕草子の佳所は大ひね抄録せられたるが如し。以前の註釋書によりこの書に撰擇せられたるところを精讀細釋せばおのづから

全部解釋の力を養ふこと能はざるにもあらざるべし。

江戸時代の國文學者によりて物せられたる擬中古文あり。これはた一讀の必要あり。それらの中英華を抜き得たりと思はるゝは

第一高等學校編 近世名家文。東京金港堂發兌
とす。三代集の註釋は

北代季吟著 八代集抄。東京國學院齋刻。價二圓

を以てよしとすべし。古今集のみならば

中村秋香著 古今集詳解。東京前川文榮閣發兌。價一圓
などを可とす。

檢定試験受験者は中古の文學といちじるしく體製を異にしかねて近代現代の文學に關係ふかき俳文俳句の一斑を知るの必要あり。俳文にては森川許六の風俗文選横井也有の鶉衣などを最とす。これを註釋せるもの。

介我著 風俗文選犬註解。京都出雲寺文治郎發兌
あり。鶉衣には

佐々政一著 鶉衣評釋。東京明治書院發兌。價三十錢

など可なり。俳句を選べるもの極めて多きも三宅嘯山の俳諧古選などにて足るべし。これには

木村架空著 評釋俳諧古選。東京廣益圖書株式會社發兌。價四十錢

この他

河東碧梧桐著 俳句評釋。東京人文社發兌。價二十五錢

などを見るべし。

有職故實の一般は中古文學をまなぶものゝ必ず合せ知らざるべからざるもの也。何となれば衣服のこと家屋のこと官職のことなどは中古の文學中いたるところにこれなきはなければ也。この事に關して要を説き得たるは

小杉楳郵著 有職故實。(早稻田文學教育講義録所載)

などなるべし。されどまた別に

關根正直著 宮殿調度圖解。東京六合館發兌。價四十五錢

同著 裝束甲冑圖解。同 價三十五錢

和田英松著 官職要解。東京明治書院發兌。價一圓
なども好著也。

以上は解釋に對する參考書の十が一也。こまかに數へ來らばかぎりなし。要
はたい百部を粗讀するよりも十部を精讀して實力を養はんこそそのぞましけれ。

二、文典の參考書

今日世に出てたる文典の著書まことに汗牛充棟也。しかれども要は説明の詳
粗引例の多少等の差こそあれ根本の原理においてさまで異同あるものを見ず。
そのうち又中等教育にある學生に適したるものとたゞ文典の法則を説き得たる
ものとあり。學生用としての好著はこゝにあぐる必要なし。たゞ受験者の參考
となるべきもの、二三をしるさむ。この方面の著書日を逐うてしげきなかにと
もかくも嶄然頭角をあらはせるは、

大槻文彦著 廣日本文典。東京弘文館發兌。價四十錢

也。人もし之を精讀せば決して他を顧るに及はじ。當講義録に收めたる。

和田萬吉著 日本文典講義

も精細也。ことに文章法において悉せりと覺ゆ。又

小山左文二著 日本文法の解説及練習。東京井湧堂發兌。價六十錢

といふ著なり。説においてさまで新しといふはかりのことなけれど例に於て甚
だ豊富也。ことに附録として各種の官立學校並に第一回よりの教員檢定試験に
あける文法の問題を網羅し官立學校の分には一々書中の本文に引きあて、誤謬
をさし示し理解を助けたるは著者に向つて多とするところ也。文法應用の力を
養はんとするものは必ずこの書を一讀すべしと思ふ。このほか古き書なれど

木居宣長著 詞の玉の緒

は、てにをば助動詞を説明することきはめて丁寧也。こも坐右に具ふべきもの也。

三、文學史の參考書

文學史の著書にして現時までにあらはれたるものゝ中にて最參考となるべき
は。

三上參次等著 日本文學史。東京金港堂發兌。價二圓

也。

藤岡作太郎著 日本文學史教科書の參考書。大坂開成館發兌
又併せ見るべし。明治の文學を略説せるは。

八

芳賀矢一著

國文學史十講。

東京富山房發兌。價七十五錢

大和田建樹著

明治文學史。

東京博文館發兌。價二十五錢

などもあり。俳諧の歴史をや、詳しく語るものには。

大野洒竹著

俳諧略史(俳諧文庫一篇にあり)。東京博文館發兌。價三十五錢

佐藤紅綠著

俳句小史。東京内外出版協會發兌。價三十錢

などあり。連歌につきては。

佐々政一著

連俳小史。

東京大日本圖書株式會社發兌。價三十五錢

川柳の如何なるものかは。

柳花著

川柳難句評釋。

東京文祿堂發兌。價三十錢

の總説を見て知るべし。

漢文科參考書案内

文學士 久保天 隨述

かゝる問題に就いて成るべく精しく調査して話して呉れろといふことであるが、予は、先年漢學研究法といふ標題の下に、略ぼ同様の事を雜誌教育學術界第八卷第六號明治三十七年二月發行に掲載したことがあるし、又その概要のみを撮んで、中等教育といふ雜誌に寄稿したことがあるので、幸にも、それが、多數人士の目に觸れたと覺ばしく、中には、後から態々書を寄せて、更に疑を正された人もある。されば、今話す事も、實は、その性質上、之と頗る類似したことであつて、讀者諸君の中の一部に向つては、或は遼東の豕であるかも知れぬ。しかし、こゝでは、其後研究の結果考へ付いた事をも書き加へ、且つ大に前回の議論を取捨したところもあるから、その積で讀んで貰ひたい。又萬一不審と思ふ點があつたならば、御遠慮なしに、下問を賜はらむことを望むのである。

予が數年來經驗する處に據れば、今の漢學に志あるもの、第一の缺點は、讀書力

の缺乏である。これは元來、講習の方法が昔と違つて、所詮この學科だけに就いては、不十分であるから起つたものであらう。尤も昔でも、講習の方法は、なかく六つかしい問題であつて、古人も之に就いては、色々頭をひねくつて考へ込んだ者らしい。例せば、佐藤一齋の初學課業次第だの、平山士龍の實用館讀例だの、古賀精里の讀書矩だの、その他、随分多くあるが、之を其儘移し來つて、今日に施せば、矢張膠瑟の見たるを免れない。勿論漢文といつたところ、左程六つかしいものでないから、日本外史の一二冊位を人から習へば、顛倒の工合などは、ざつと呑み込み、和刻の訓點付などは、大抵讀めるし、無點でも、どうやら、こうやら讀むことが出来る様に成る。しかし、予の私見にして、誤なく、むは十八史略蒙求の二書は、依然として、入門となすべき價值がある。何となれば、この二書に於ては、普通用ふる故事、或は常套の話柄となつて居る逸話などが、大抵網羅してあるから、尤も其積つて作つたものである。これを諳記する程念を入れて讀めば、歷代の作品を解する上に於て、非常の助に成るし、且つ東洋的趣味を最も簡便に領得することが出来る。何にしても、これ等は初學必讀の書である。次に文章軌範(正續)唐宋八大家文を讀めば、略ぼ文章の變

を盡して、漢文の何者たるかを、ざつと知ること出来やう。文章軌範には、拙著精義(三卷、東京博文館發行、代價一圓五十錢、但し正篇だけがある。その他、同類の者極めて多いが、これぞと推薦すべきものはない。しかし、讀書力を養ふに最も痛切なる利益のあるのは、左傳と漢書とであらう。左傳の文は、他に比類なきまで簡潔で、大抵數字を添へて見なければ、文章が思ふ様に接續しない位であるし、且つ一種特別な文字使用法があるから、反覆沈潜自ら粗讀の弊を救ひ、且つ言外の意を領するに慣れしむる便がある。次に漢書の文は、固より史記に及ばないが、顏師古の註が最も價值があるので、この註に熟すれば、常に用ふる大抵の文字は十分に意義を明かにし、他書に向ふときは、破竹の勢である。以上二書は、坊刻本の中、どれでも善いが、左傳は、杜預の註の外に、安井息軒の輯釋を併せて見るが好い。それから、四書五經(特に詩經及び書經)、これは朱註と古註、古註は、十三經註疏中に收む。古刻本ならば、十五圓以上、二十四以下。新刊石印本ならば、五六圓を併せ讀み、更に進んで、邦人の註釋を讀み、論語は、殊に安井息軒の集說などが、平易で善からう。なほ四書の註釋としては、拙著四書新釋(六卷、東京博文館發行、代價二圓十錢)がある。勿論四五

年前の著作で、今から観れば、自ら不満足に思ふところも、少くないが、初學者には便利であるやと自信する。それから、何の註でも善いから、諸子の類をも讀み、この間、手あたり次第に、何でも讀んで見るといふ意氣込があらば、點の有無に拘らず、やがて殆んど讀めぬものは無い位に成る。それから後に、少しく、専門的に、秩序を立て、遺つて見やうといふのである。

序にいふが、日本文學全書に對して、支那文學全書といふものがあつて、博文館から刊行したことがある。その收むるところは、經子の重なるもので、一寸便利らしいが、その註といへば、最も手近なものを直譯したもので、とんと役に立たぬのみならず、之を机上に備へるのも、あまり見^み察^さのせぬ様な感がある。何は兎もあれ、書は務めて善本を擇ぶべく、殊に註の善いのに限る。なほ諸子に就いては、後段重ねて話をする。

讀書力の涵養は、かくの如く、而して、特に諸君に望むのは、少しでも怪しいと思ふ字は、一々字書に當つて正確なる發音と意義とを調べることである。この勞を惜む様では、いつまでたつても、進歩せぬのみならず、到底誤魔化しの範圍を脱せず、着

實眞快なる態度と口に距つて行くものである。そこで、字書は、何が善いといふに、坊刻のものは、汗牛充棟も管ならず、近ごろは、漢和^大字典三省堂編纂兼發行、正價四圓といふのがあるし、又之を縮めたものもあつて、大に世に行はれやうである。しかし研究用としては、矢張康熙字典の上に出づるものなく、又なかるべき筈である。この書は、和刻も數種あるが、卷帙浩濶で、机上の用には不便であるから、舶載の石印縮刷本が善い。これにも數種があるが、中で最上なるものを擇ぶべく、代價は一圓以上一圓五十錢位である。それから、五車^韻府といふ、小さな漢英字書もあるが、使ひ様によつては、一寸便利なこともある、代價一圓ばかり。それから、熟語故事に至つては、不幸にして、未だ便利なるものを發見しない。佩文^韻府、太平御覽、淵鑑類函、事類統編、事文類聚などいふものは、立派なものではあるが、もと著作作用としたものであつて、研究用としては、排列編纂、その當を得ないといふ感がある。しかし、それも使ひ様によつて、固より役に立たぬでもない。以上の書は、いづれも、大部頭の者であるが、この頃は、石印があるから、極めて廉く、太平御覽が十圓位、淵鑑類函は六圓位である。げにや、石印^殊に寫真石版は、支那近代印刷術の一大進歩であつて、原本

の文字を毫も變せず且つ非常に縮め得るので、現に淵鑑類函の如きは、三欄に組んで、原本の六枚を以て、新本の一枚としてある。されば、字は勿論小さいが、外國語のポケット入れの字書さへ見得る以上は何でもない。

それから人名辭書には、萬姓統譜二十四、史姓氏韻編尙友錄の類があるし、近頃は、支那人名辭書啓文社發行、正價七圓が出来たが、これは悲しいかな、孟浪杜撰の誦を免れない。次に地名辭書には、李兆洛の地理韻編(石印本一圓位)とプレイフェアの英文支那地名辭書(共益商社翻刻、正價三圓五十錢)がある。拙著東洋歴史大辭典(同文館發行、定價九圓)は、重要な人名地名等を勉めて網羅した積であるから、大抵の場合には役に立つことと思ふ。その又次に、目錄解題は、昔から随分多いが、一番善いのが、四庫全書總目提要代價十六圓位、それを節略したのが、四庫全書簡明目錄、近ごろは石印の縮刷本があつて、張之洞の書目答問と合して一帙に成つて居る(代價一圓序に云ふが支那で作つた特殊の字書類は大抵韻に因つて分けてあつて、韻を知らぬ人には二倍の時間を要すること故、豫め此方の準備も、少しは爲すばなるまい。

扱て、これから、愈よ専門的研究に亘るのであるが、諸種補助學科の事は、各専門の先生が扣へて居られるから、こゝに私見を述べるまでもなく、且つこゝに専門的研究といふも、その根本的方法を述べるよりも、普遍的に簡易なる方法を述べるが至當であると思ふから、先づ今日世上に流布する参考書より始め、その後、更に一步を進めた處に及ぶことにしやう。

第一、支那哲學——もう少し大きく、東洋哲學といつても善い。これに關する参考書の主要なるは、東洋倫理學史(木村鷹太郎著、上卷、松榮堂發行、正價二圓八十錢)支那哲學史(文學士遠藤隆吉著、金港堂發行、定價一圓二十錢)宋學概論(小柳司氣太著、哲學書院發行、定價五十錢)東洋倫理學史要(文學士久保得二著、育成會發行、定價一圓六十錢)位なものである。それから、特殊なものには、王陽明(文學博士三宅雄次郎著、哲學書院發行、定價八十錢)陸象山(文學博士建部遜吾著、哲學書院發行、定價五十五錢)楊墨哲學(文學士高瀬武次郎著、金港堂發行、定價一圓)等がある。その他、孟亞聖(西脇玉峰)孔子の學說(松村正二著)孟子の學說(同上)等の者もあるし、博文館發行の帝國百科全書中に、東洋倫理學史(木村鷹太郎著)、支那哲學史(文學士中内義一著)等があるが、そ

の研究に於て、その叙述に於て、甚だ御氣の毒ながら、不完全なる個處が頗る多くて、動もすれば、初學者を誤るの處ところが無いでもない。

それから更に進んで、詳しい處を遣つて見やうといふのならば、先秦の諸子より始めて、自分で研究するのであるが、その對象となるべきものは、第一に四書五經、殊に易書詩の三經、その註釋書類は、前に述べたから、こゝに省略する。尤も、前のは、讀書力の涵養に資する爲に、主として、文章的、語學的に見たのだが、今度は、思索的、哲學的に見るのである。次に諸子は、老莊列荀の類、いくらも和刻で、單行して居るが、十子全書、代價七八圓などが、まとまつて居て、且つ便利である。十子とは、老子、莊子、荀子、列子、管子、韓非子、淮南子、揚子法言、文中子、鶡冠子であつて、諸子の重要なるものは、大抵備はつて居るといつても善い。しかし、老子は河上公の偽註であるから、外に王弼註及び蘇徹の評註などを見なければならぬ。莊子は、郭象の註であるが、なほ他に林西仲の莊子困陸樹芝の莊子、宇津木某の解莊などを見るが好かるう。林希逸は老莊列三子の註を作つたが、ともに参考の價値がある。韓非子は、普通世に行はれて居る解詁全書で善い。源利用の註は、善本であるが、刊本がなく、一二の圖

書館を除く外、稀に世に存して居るだけである。次に物徂徠の讀荀子讀韓非子などは、ともに是非讀まねばならぬ。以上の諸書は、莊子雪を除くの外、大抵和刻がある。それから、墨子、關尹子の如きも一讀の必要がある。

宋より以下には、宋元學案代價七八圓、明儒學案五六圓、國朝學案小識代價二三圓の三書がある。これは、支那近世哲學史資料ともいふべき者で、支那に於ける有数の撰述である。試にその體裁を謂へば、哲學者の傳記を第一に掲げ、その著書中、重要な文句を節略して載せ、最後に學者の批評を附記したので、これだけ讀めば、略ぼ十分。この上、詳しい處といへば、各人の著作全體に就いて研究する外はない。

支那宋明の後を承けて發達した日本哲學に關する參考書には、別に其人があることゝ心得るから、こゝに省略する。

第二、支那文學——今人の著述は、先秦文學文學士藤田豊八著、東華堂發行、正價四十五錢、支那小説戲曲小史文學士笹川種郎著、同上、正價三十錢の外、支那文學史と銘を打つたものに、古城貞吉著、富山房發行、定價一圓八十錢、文學士笹川種郎著、帝國百科全書に收む、博文館發行、定價三十五錢、文學士久保得二著、人文社發行、定價一圓五

十錢などがある。又世界文學史叢書に收めたジャイルス英文代價三圓のも、時に誤謬はあるが、多少面白い處なきにしもあらずである。それから藤田前川白河大町田岡久保六氏の合著に係る支那文學大綱といふのが、十五冊まで出て居る。これは、その時代を代表する文豪を中心として叙述したので、全部を一貫して讀めば文學史の或る部分を、更に精細に研究したことに相當する。

先秦時代の文獻は、その本來の特質如何に拘らず、すべて文學史上の題目となるべき價値があるので、四書五經諸子などは、哲學史、文學史の研究に共通である。それから文學史の研究には、その外に、春秋三傳、國語、戰國策の類も見なければならず、文學として最も純粹なのは詩經と楚辭とで、これは、特に深い研究を要する。詩經の事は、前にも述べたが、楚辭の註解は、王註朱子の集註、林西仲の楚辭燈の類で、これも和刻本がある。

漢魏六朝の間のものは、文選さへあれば、大抵分かる。これには、李善註が第一であつて、唐本ならば、代價三四圓それから、文では、唐宋八家文及び文粹の類、陳龍川方正學、宋景濂、唐荆川、陳白沙、王陽明、歸震川、劉蕡山、汪堯峰、朱竹垞、袁隨園、孫忠靖など、いづ

れも邦人の選に係る文粹があつて、どれでも、代價一部五十錢内外を通觀すれば、宋明より近清に至るまでの間、散文の概略を知ることが出来る。

次に詩に就いては、先づ第一は解知力、更に進んで鑑賞力を養はねばならない。それには、森槐南の唐詩選評釋(新進堂發行)、六卷、二圓位、野口寧齋の三體詩評釋同上發行、三卷、代價一圓位)でも見るが善い。尤も是は著者が作家であるだけに、作法の方面から論を立てた處が多く、初學者には、やゝ高尚すぎるかも知れないが、外に適當なものもない。しかし、唐詩選には、従前邦人の註釋めいたものが随分多くある。この頃、檢定試験の問題として、詩一首、大抵この本から出るから、特別に念を入れて觀て置くことが必要だろふと思ふ。それから、餘力あつて、稍や専門になるといふと、沈德潛の古詩源、五朝別裁集があれば、上は堯舜時代より、下は康熙乾隆の間に至るまで之を一貫して、その大畧を知ることが出来る。その上、詳しい處といへば、隋以前は、古詩錄、古詩歸、古詩紀、唐は、唐詩歸、唐詩正聲、唐賢三昧集の類を取りまぜて讀むが善いし、宋には、宋詩鈔あり、元には、元詩選あり、明には、明詩綜あり、清には、湖海詩傳、江西詩徵、國朝詩人徵略あり、これにて澤山。なほ詩話、即ち詩論に就いては、笠翁軒

叢書近藤元粹輯嵩山堂發行、全十卷、代價一卷四十錢といふのが、手近なものを數多く集めてあつて、至極便利である。

この上になると、それこそ全く専門的で、先づ先秦諸家の作品に繼いで、漢魏六朝一百三名家集、全唐詩、全唐文の三書があらば、唐までの詩文、大抵悉く備はる。それより後は、詩文ともに各人の全集を繙く外はない。

普通謂ゆる詩の姉妹であつて、且つ元の雜劇傳奇の母ともいふべきものが詞一名填詞(詩餘)である。その研究に就いては、初步の處が、田能村竹田の填詞圖譜、嵩山堂發行、正價三十錢で、その作法を調らべ、夏承衡の清綺軒詞選、代價一圓で、其例を見る。なほ進めば、萬紅友の詞律と朱竹垞の三朝詞綜とがある。その上は、専門的で、花間集、草堂詞選、絶妙好詞箋を始とし、あとは、各人の全集に就いて研究する。

小説の中、一番読み易いのが、三國志、代價一圓五十錢、それから水滸傳、代價一圓、西遊記、代價一圓、紅樓夢、代價一圓五十錢、これが謂ゆる支那の四大小説、少し骨が折れるが、讀めば勿論善い。近人の作は、一々舉げるも煩はしい。次に美文の標本としては、朔宗吉の剪燈新話、四六駢儷の典型として、燕山外史、この二書は、從來邦刻本も

あるし、註釋もある。それから、狐妖鬼跡を記したのが聊齋志異、これも註解附の新刊石版船載本がある。戯曲では、西廂記、實の處は、六つかしいのだが、邦人の註釋も、二三種はあるから、先づ第一に食つて懸るに都合が好い。この後には、琵琶記、牡丹亭、笠翁十種曲、紅雪樓九種曲などがある。又小説、戯曲中の俗語を解釋したものに、小説字彙などいふものがあるとは聞いて居るが、一寸求め悪いものであるから、自分で考へて讀み、分らない處は、さるべき人に聞く外はない。これだから、支那の俗文學の研究は、なかく六つかしいのである。

次が日本人の詩は、甚だ憫むべく、且つ誠に氣の毒至極なものであつて、今日の處全く闕却されて居る。勿論、日本人が、自國の言語文章でなく、他國の古文學を擬作するといふのは、頭から間違つて居る話ではあるが、その影響感化の偉大なること、なかく馬鹿には出來ないから、さう見捨てたものではない。しかし、真正の詩文は、全く近代である。王朝時代の懷風藻、文章秀麗集、さては本朝文粹の類、一二枚讀む時、欠伸の連發に妨げられるべく、餘儀なくせられるのは、誰でも同じ事である。元來日本人の漢文は、徳川時代に於て、はじめて觀るべきものがあるの、これには、

適當な選本がないから各人の集に就いて観る外はない即ち徂徠栗山山陽長齋宿
浦宥陰節齋拙堂養才これ位で十分である。若し夫れ詩に就いては羅山の子の向
陽林子の本朝一人一首と江村北海の日本詩史この二書がありさへすれば上は弘
文天皇より下は元祿時代に至るまで詩の變遷の大略が分かる。之に次いで清
人俞曲園名は樾の東瀛詩選で上は林羅山より始め下は明治時代の名家就中現存
せる岡千仞南摩綱紀跡見花蔭などまであるし且つ各人に關する評論中往々にし
て取るべきものがある。唯だ惜い事には材料がまだ十分でないので五山の詩人
雪村中巖絶海鄂隱の如きはその一首をだに載せず元祿の名家たる梁田蛻巖は撰
者自身後篇しか見ないといつて居るし秋山玉山の如きも何かの選本から取つた
ものと見え鴻門高の如き觸醜杯歌の如きともに載つて居ない。しかし何にしる
便利な本であつて従來世に行はれた滕水晶の日本詩選の如きほんの間に合せな
ものとは凡て位が違ふ。

これより進めば又ぞろ専門的で面倒でも王時朝代の諸集を讀み次いで五山の
文學それから徳川時代諸家の全集といふ順序である。

第三支那史學 一これは今日の時勢からいつても勿論必要であるが漢學を修
めるものには何時でも更に必要である。何となれば支那人の詩文は常に典故を
重んじそれが皆歴史から出て來て居るから歴史の知識のないものには輕我に
も漢文漢詩の妙の分かる氣遣かない。しかし之に關する撰述は割合に少く勿論
中學用の教科書などは随分あるがそんなものは參考に成りそうにもしない。そ
こで強ひて二三を舉ぐれば文學博士那珂通世氏の支那通史五卷まで刊行拙著東
洋通史博文館發行全部十二卷代價五圓位なものである。そこでこれは是非とも
支那人の著作に據らなければならぬ。その第一通史として推稱すべきものの中
最も簡明なのは御批通鑑輯覽船載活字本四帙二十四卷代價五圓でこれより詳し
いのは資治通鑑邦刻本數種ありこいつは毎年さまつて檢定試験の問題に出るか
ら十分讀まねばならぬ。それから時代の關係から之に接續するのは宋元通鑑も
しくは續資治通鑑である。

この上とならば二十四史史記漢書後漢書三國志晉書宋書南齊書梁書陳書魏書
北齊書周書隋書南史北史唐書舊唐書五代史舊五代史宋史遼史金史元史明史及び

清朝の歴史材料たる東華全録と九通文獻通考續文獻通考皇朝文獻通考通典續通典皇朝通典通志續通志皇朝通志とがあれは澤山。これだけの本を買ひ揃へるに、舊刻本ならば、少くも六七百金を要したのが、今はいづれも石版本があつて、二十四史は七十圓位、東華全録は十六七圓、九通が七十五圓位、合せて百五六十金で済む。この上は、全く専門的で、如上諸書の根本資料を自ら調査するのである。

第四支那語學——といつたところで、未開の學問で、こゝに述べることも出来ないが、その中一寸話して置くべきは、支那文典であつて、之に關する歐人の著書は、随分あるが、邦人の手に成つたものは、寥寥晨星も當ならず、それも、自分の新研究でなく、全く受賣たるに至りては、嘆息の外はない。そこで、強めて二三を舉ぐれば、漢文、典文學士猪狩幸之助著、發行所、定價調査中、漢文典、兒島獻吉郎著、富山房發行、定價七十錢、漢文通則、川野健作著、大日本圖書株式會社發行、定價五十錢位なもので、この根本といふべきは、馬建忠の馬氏文通、二帙十卷、代價三圓位である。馬建忠は、李鴻章幕下の一人で、明治十五年朝鮮壬午の亂に、この地に乗り込み、大院君を引つかまへて、支那へ還つたこともあつて、歷史上、一寸覺えて居ても善い人であるが、かつて久

しく佛國に駐在し、そこで歐西の智識を得、やがて西洋の文典に倣つて、この著を出したといふことで、今では、支那文典の一大典據と成つて居るものである。

これに次いで、支那語及び時文の講習に就いても、これぞと思ふ様なものはなく、殆んど二十年前の出版たる亞細亞言語集が、今でも行はれて居るといふ次第。又時文には、清國時文類聚、伊藤松雄著、明治書院發行、定價四十錢、支那時文讀本、大野徳孝編、訓點註釋、大日本圖書株式會社發行、全二卷、各三十五錢などがある。

附記——本文中に載する新刊舶載本は、東京市日本橋區通一丁目、又は大阪府東區心齋橋通博勞町角青木嵩山堂、又は東京市本郷區本郷三丁目文求堂等に就いて問ひ合せらるべし。又邦人著作の者にして、代價等、十分に調査せざるものあり、然れども大體に於ては、甚しき誤謬あらざるを信ず。

▲神人之言微聖人之言簡衆人之言多小人之言妄
 ▲士君子不能陶銘人畢竟學問中工力未透▲
 讀書須尋出書中眼目始得▲以書史爲園林以歌
 詠爲鼓吹以理義爲芥梁以著述爲文繡以誦讀爲
 蓑帶以記問爲居積以前言往行爲師友以忠信篤
 敬爲修持以作善降祥爲因果以樂天知命爲西方

醉古堂劍掃抄

教育科研究の順序

中島半次郎述

教育を研究するには、先づ教育史より入るを可とす。教育史は教育の實際に行はれたる有様、教育の學說及び制度の變遷を記載し、教育家の重なる事業をも併せ記するを以て、之を調ぶるに依りて、略々教育の如何なるものたるかの概念を得べし。教育史を研究するには左の書に依るべし。

- 日本教育史上下二冊
 佐藤誠實著 ○上定價六十錢 下六十五錢
 東京市京橋區銀座丁目大日本圖書株式會社
- 武士道發達史
 足立栗園著 ○定價四十錢
 東京市神田區表神保町辻本修學堂
- 日本近世教育史
 横山達三著 ○定價二十五錢
 東京市神田區表神保町同文館
- 心學史要
 足立栗園著 ○定價四十五錢
 東京市日本橋區通一丁目大倉書店
- 支那教學史畧上下二冊
 東野長知著 ○定價二冊合せて七十五錢
 東京市京橋區南傳馬町一丁目吉川弘文館
- 支那哲學史
 松本文三郎講
 本講義録の中にあり
- 歐洲教育史要
 谷本富綱著 ○定價七十錢
 東京市京橋區南傳馬町三丁目目黒書店

教員檢定試験問題擬答

附錄 教育科研究の順序

内外教育史
教育史教科書

能勢榮著 ○定價八十錢
東京市日本橋區本町一丁目金港堂
中島半次郎著 ○定價七十五錢
金港堂

教育史にて大體の概念を得たらば進んで教育學の研究に入るべし。教育學の研究は、教育研究の中心に立つべき者なり。教育學の研究には左の書を參考すべし。

教育學講義

大洲其太郎著 ○定價一圓四十錢
東京市日本橋區通三丁目成美堂

坪氏實踐教育學

藤代神輔譯 ○定價七十五錢
東京市日本橋區本町三丁目博文館

リンドネル教育學教科書

湯原元一譯 ○定價八十錢
金港堂

トッセル教育學

熊谷五郎譯 ○定價三十五錢
金港堂

社會的教育學講義

吉田熊次著 ○定價一圓四十錢
金港堂

教育學の研究と共に、教育學の補助學たる倫理學、社會學、心理學、論理學、生理學は、一
通り目を通さざるべからず。

倫理學序論

渡邊龍聖著 ○定價六十錢
東京市神田區小川町開發社

社會學講義

河和民著 ○定價一圓十錢
開發社

教育的心理學

湯原元一編 ○定價一圓二十錢
金港堂

心理學教科書

大瀧其太郎、立柄教俊共著 ○定價六十錢
金港堂

論理學

大西祝著 ○定價一圓十錢
東京市京橋區尾張町三丁目開發社

論理學教科書

大瀧其太郎、立柄教俊共著 ○定價六十錢
金港堂

近世生理學教科書

丘淺治郎著 ○定價五十錢
大阪市東區心齋橋北久寶寺町開發社

學校衛生學

三島通真編 ○定價七十錢
博文館

教育學及び之が補助學の研究を爲したらば、教育を實際に行ふ上の教授、訓練、管理
の研究を爲さざるべからず。教授法、訓練法、管理法の研究は、左の書に依るべし。

リンドネル教授學

湯原元一譯 ○定價六十五錢
金港堂

新説教授學

横山榮次著 ○定價三十五錢
金港堂

各科教授法精義

森岡常藏著 ○定價一圓八十錢
同文館

訓練法摘要上下二冊

佐々木吉三郎著 ○定價各一圓七十錢
同文館

管理教科書

田中敬一著 ○定價七十五錢
金港堂

猶教育制度につきても、一通り調べざるべからず。これには左の書に依るべし。

教育行政

木場貞長著 ○定價八十錢
金港堂

教員檢定試驗問題解答目 附錄 教科研究の順序

修身科参考書案内

文學士 有馬祐政述

第一 倫理學の部

一、翻譯書にて重要なものを左に掲ぐべし

- 一、イギリス倫理學 英國ケリー著、文學士四番一第發行 ○定價貳圓
 - 二、倫理學 英國ミューア著、文學士四番一第發行 ○定價貳圓
 - 三、倫理學 英國マックスウェル著、文學士四番一第發行 ○定價貳圓
 - 四、倫理學大系 英國マックスウェル著、文學士四番一第發行 ○定價貳圓
 - 五、倫理學提要 英國マックスウェル著、文學士四番一第發行 ○定價貳圓
 - 六、倫理學精義 英國マックスウェル著、文學士四番一第發行 ○定價貳圓
 - 七、倫理學概論 英國マックスウェル著、文學士四番一第發行 ○定價貳圓
 - 八、倫理學說批判 英國マックスウェル著、文學士四番一第發行 ○定價貳圓
- 右の中二と七と最も簡明なり、其の他解説類のものは東京本郷區森川町一番

地育成會にて數多發行し、有名なるものは大抵網羅したり

二、日本出來のもの、中、重要なものは次の如し

- 一、倫理學 富山房發行 ○定價一圓二角五分
- 二、倫理學 東京博士大西祝著 ○定價一圓六角
- 三、倫理學 金澤博士服部宇之吉著 ○定價八十五錢
- 四、倫理學 東京博士藤井健次郎著 ○定價一圓四角五分
- 五、倫理學 東京博士藤井健次郎著 ○定價一圓四角五分
- 六、倫理學講義 富山房發行 ○定價九十錢
- 七、倫理學 竹内補三著 ○定價八十錢
- 八、倫理學講義 東京博士吉田靜致著 ○定價一圓七十錢
- 九、社會的倫理學 東京博士吉田熊次著 ○定價八十五錢

右の中一、二、五、八、九、いづれも佳なり、其の二三を讀めば足れり、但し五の「倫理學要」は必讀の書の一なり。

三、原書的重要なるもの

教員檢定試験問題解答 附録 修身科参考書案内

- | | |
|---|------|
| 1. Prolegomena to Ethics—Green. | 6.25 |
| 2. Elements of Ethics—Muirhead. | 1.00 |
| 3. System of Ethics—Paulsen. | 2.00 |
| 4. A Manual of Ethics—Mackenzie. | 2.75 |
| 5. Introduction to Ethics—Thilly. | 2.00 |
| 6. The Methods of Ethics—Sidgwick. | 7.50 |
| 7. The Elements of Ethics—Hyslop. | 1.75 |
| 8. Principles of Ethics—Spencer. | 8.00 |
| 9. Ethics—Wundt. | 7.25 |
| 10. A Review of the Systems of Ethics—Williams. | 2.00 |
| 11. The Science of Ethics—Stephen. | 2.00 |
| 12. A Study of Ethical Principles—Seth. | 2.00 |
| 13. Ethics—Mezes. | 2.00 |
| 14. The Metaphisic of Ethics—Kant. | 2.00 |
| 15. Moral Order and Progress—Alexander. | 2.00 |
| 16. Outlines of Critical Theory—Dewey. | 2.00 |
| 17. Practical Ethics—Hyde. | 2.00 |

18. Constructive Ethics—Curtney.

就中九と十四と最も著名なり。

第二 西洋倫理學史の部

一 日本出來のもの

- | | | |
|--------------|----------------|---------|
| 一 倫理學說十回講義 | 文學博士中島力造著 | ○定價九拾錢 |
| 二 西洋倫理學史 | 早稲田大學出版部發行 | ○定價壹圓卅錢 |
| 三 倫理學史 | 富山房發行 | ○定價壹圓 |
| 四 西洋倫理學史講義 | 文學士吉田靜致著 | ○定價貳圓廿錢 |
| 五 トマン 西洋倫理學史 | 同氏倫理學角田柳作譯 | ○定價七拾五錢 |
| | 第二卷翻譯金港堂(助出)發行 | |

二又は四にて事足るべし。

二 原書は餘り多くを聞かず今は唯左の一部のみを掲げん、

1. Outlines of the History of Ethics—Sidgwick.

1.75

三 東洋と共通のもの

(原書はすべて日本橋區通三丁目丸善書籍株式會社に注文せらるべし)

教員指定試験問題解答 附録 修身科參考書案内

第三 支那倫理學史の部

支那倫理の淵源たる四書、即ち論語、大學、中庸、孟子は、ぜひと精讀せらるべし、其の註釋本は種々あれども、論語は何晏、皇侃、孟子は趙岐、學庸は朱熹の註よろし、朱熹のは新註といひ、四書共にありて、四書輯疏に詳悉せり、之に對して何晏、趙岐等のものを古註といふ、別々に行はれをれり、但し必ずしも此等の原本に依られずとも、新古を併用して、公平に解釋せる、普通の四書講義本に就きて、熟讀せられて可なり、毛利貞齋の四書俚語、經典餘師、并に皆川淇園の四書釋解も參考すべし、其外大阪續文館發行の山本梅崖述四書講義、東京博文館發行の久保得二編四書新釋、及び東京誠之堂發行の深井鑑一郎等述四書講義、適當ならん、尙餘力あらば、書經、易、詩、書、禮、春秋、朱子の近思錄、小學、學的、王陽明の傳習錄、二輪執齋の標註、佐藤更に黃宗羲の宋元學案、明儒學案、唐鑑の國朝學案、小識、先正事略等、閱讀あらば、頂上なり、次に、

- 一 東洋倫理學史 卷上 木村 憲太郎 著 ○定價貳圓八拾錢 博文館發行

- 二 支那哲學史 文學博士 遠藤 隆吉 著 ○定價壹圓廿錢 金港堂發行
- 三 支那哲學史 文學博士 中内 義一 著 ○定價肆圓四拾錢 上五拾五錢 博文館發行
- 四 支那思想發達史 文學士 遠藤 隆吉 著 ○定價壹圓六拾錢 富山房發行
- 五 東洋倫理史要 文學士 久保 得二 著 ○定價壹圓參拾錢 育成會發行

右の中、四と五とあればよろし。

二 特殊のもの

- 一 諸子大意 萩原 牛 裕 著 ○定價廿五錢 東京牛込神樂坂下益友社發行
- 二 宋學概論 小柳 司 氣 著 ○定價參拾錢 哲學書院發行
- 三 孔子研究 文學博士 江 義 丸 著 ○定價貳圓 金港堂發行
- 四 東洋 孔子の學說 松村 正一 著 ○定價卅五錢 育成會發行
- 五 孟亞聖 西脇 玉 峯 著 ○定價參拾錢 哲學書院發行
- 六 楊墨哲學 文學士 高瀬 武 次 郎 著 ○定價壹圓五拾錢 金港堂發行
- 七 陸象山 文學博士 建部 遜 吾 著 ○定價五拾五錢 哲學書院發行
- 八 王陽明 文學博士 上宅 雄 次 郎 著 ○定價八拾錢 同發行

教員檢定試験問題解答

附録 修身科參考書案内

九 王陽明詳傳

文學士高瀬武次郎著 ○定價七拾五錢
東京本郷區四丁目文明堂發行

右の中一と二と三と最も必要なり、七、八も亦甚だ有益なり、其他法學士山田喜之助著、孔教論、亘理章三郎著、孔門之德育、福地源一郎著、孔夫子等あり、全般に亘たりたるものに、狩野良知著、支那教學史略、京橋區南馬場町二丁目吉川半七發行(定價七拾五錢)あり。

第四 日本倫理學史の部

日本倫理の淵源としては、日本書紀并に古事記の神代卷を讀まるべし、書紀には飯田武郷著、書紀通釋あり、記には本居宣長著、古事記傳あり、教育勅語の釋義を爲せる大家の著書を通覽すること固より大切なり、其の他、東京育成會發行の文學博士井上哲次郎同盤江義丸共編、日本倫理彙編(定價十四圓)、東京博文館發行の赤堀又次郎編、心理叢書(定價金二圓四十錢)、東京博文館發行の文學博士井上哲次郎文學士有馬祐政共編、武士道叢書(定價圓五拾錢)を通讀せば、裨益する所多かるべし、尙又東京開發社發行の足立栗園編、日本道德叢書、東京文學同志會(神田區錦町一丁目)發行の山本樸峯編、心學新編等參考すべきもの少からず、敘述評論せる書類は、次に之れを列載すべし。

一 全般に亘れるもの

- 一 日本倫理史稿 湯本武比古、石川岩吉共編 ○定價壹圓六拾錢
東京神田區小川町九番地開發社發行
- 二 日本哲學要論 文學士有馬祐政著 ○定價九拾錢
東京神田區駿河臺四江梅町光融館發行
- 三 日本倫理要論 同 富山房發行 ○定價卅五錢

右の中一と二あれば可なり、尙東京大日本圖書株式會社發行の文學博士佐藤誠實著、日本教育史、東京同文館發行の文學士横山達三著、日本近世教育史も參考すべきものなり。

二 特殊のもの

- 一 日本之陽明學 文學士高瀬武次郎著 ○定價五拾錢
舊鐵華書院發行
- 二 日本陽明學派之哲學 文學博士井上哲次郎著 ○定價壹圓四拾錢
富山房發行
- 三 日本古學派之哲學 同人 房人 發行 ○定價壹圓六拾錢
- 四 山崎闇齋派之學說 法寶慶次郎著 ○定價七拾錢
東京日本橋區本石町三丁目金昌堂發行
- 五 神道發達史 足立栗園著 ○定價卅五錢
開發社發行
- 六 近世德育史傳 同人 開發社發行 ○定價八拾五錢

教員檢定試験問題解答 附錄 修身科參考資料

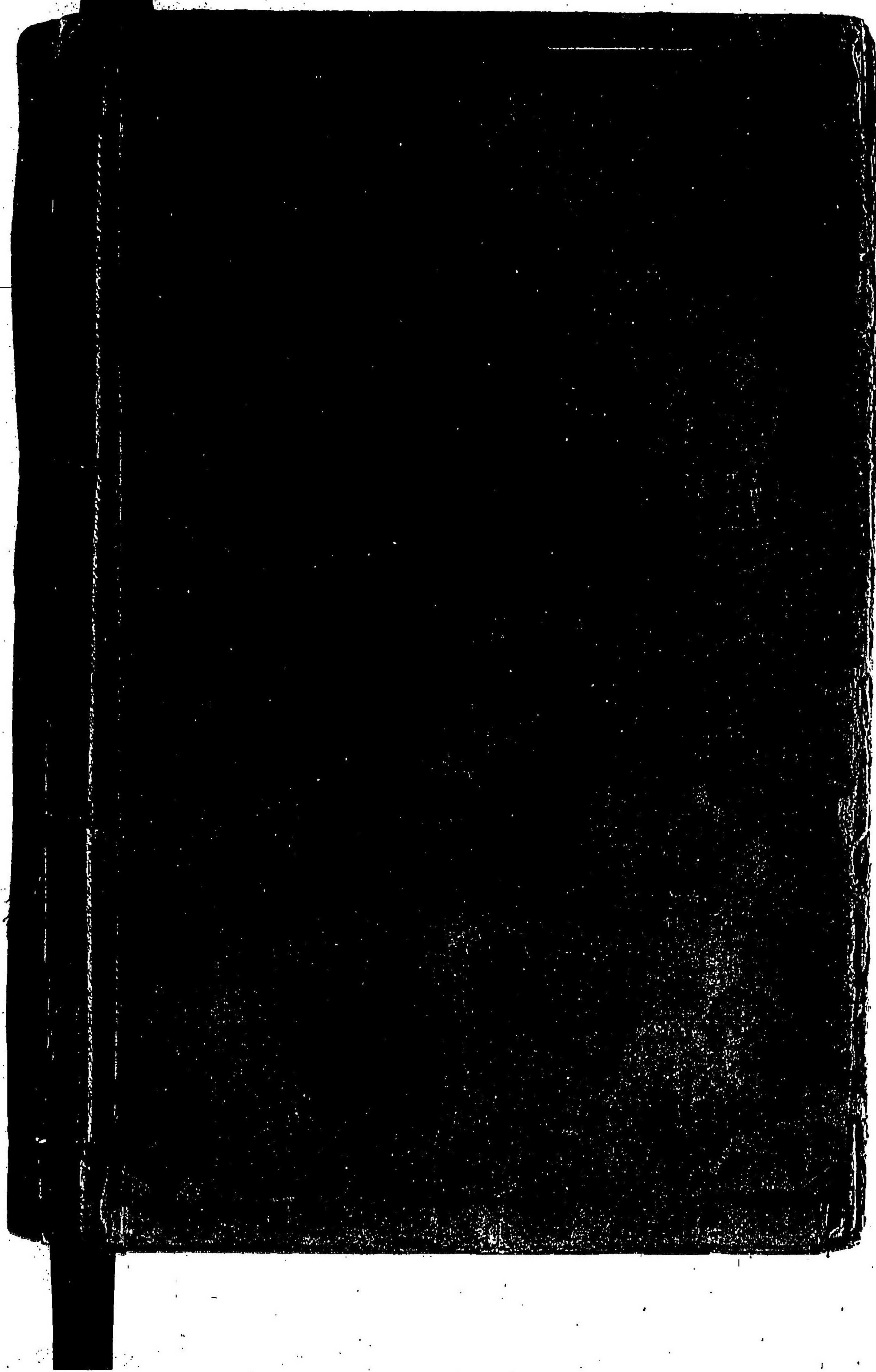
62
397

- 七 近世心學史要 東京日本橋區一丁目大倉書店發行
- 八 武士道發達史 足立栗園著 〇定價四拾錢 發行(町東神田區表神寶)
- 九 日本武士道 內藤四郎著 〇定價四拾錢 發行(町東神田區表神寶)
- 十 Bushido (The Soul of Japan) 東京日本橋區通二丁目十八番華房發行 並四拾五錢

右の中二と三と四と七と八と九と十も亦一讀の値あり。

〔附記〕 本講義録に掲載のものを根據として此等の書を參考せらるべきは勿論のことなればそのつもりにて列記したるものなり。

教員檢定試験問題擬答附録 終



310499-000-0

62-397
教育検定試験問題擬答
修身、教育、国語乃漢
文科完結

第18回

久保得二等述